
Fate/soul night

教授

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / s o u l n i g h t

【Nコード】

N 8 4 7 9 S

【作者名】

教授

【あらすじ】

聖杯戦争において、凜が呼び出したのは皮肉屋の赤い弓兵ではなく、一介の剣豪であった。そして、彼は英霊の座についていなかった。しかし、彼は魔術師、聖堂教会、退魔師、果てには真祖までもが消滅を願う剣と魂の物語の関係者の一人でもあった。正史から離れた物語はどのような結末を迎えるのか・・・

というわけでよくあるクロス物です。クロスするのはソウルエッジシリーズです。今までにF a t eとのクロス物を読んだのですが、これとクロスしたものを自分は見たことがありませんので、妄想が

爆発しました。

・・・もしかしたら、あるのかもしれませんが・・・
ちなみに弓兵ですが、もちろん召喚されます。ただし、真アサシンは多分出ません。またネタばれになりますが、アルゴルは始まりの王「始祖王」とし、ギル様は彼の部下だったという設定とします。この設定に不快感を持つ方は読まないほうがいいです。

書くのは初めてなので、感想・ご意見等ありましたら是非よろしく
お願いします。ただし、これが自分の勝手な妄想であることは十分に理解していますので、それに対する批判はご遠慮願います。

第一話「召喚」（前書き）

ちなみに自分は原作のFateをやったことはありません。そのため至るところで矛盾が出てくると思っています。その点はご容赦願います。

可能な限り他の方々のを読んで、できる限りなんとかします。

第一話「召喚」

聖杯戦争、それは七組の魔術師と英霊によるなんでも叶う願望器（聖杯）を懸賞とする殺し合い。

今までに四度行われたが、願いを叶えた魔術師が一人もいないという異常な戦争。

その凄惨な戦争に参加する少年少女たちの運命「Fate」の物語である。

時刻は深夜、聖杯戦争の創設者の一つ遠坂家において

遠坂現当主である遠坂凜は今まさに聖杯戦争に勝ち抜くためのパートナーであるサーヴァント召喚の儀式を行っていた。貴重な宝石を惜しげもなく使って魔法陣を描き、その中心には英霊を呼ぶための物―触媒が置いてあった。触媒とは英霊が所持したもののや関係しているものであり、それを使用することによって英霊を引き寄せるのである。儀式が滞りなく進んでいるなか、彼女は今更ながら異様なまでの不安を感じていた。

触媒として置いてあるのは、草臥れた足袋……そこからは夥しいほどの気配を感じとっていたからだ。元々彼女がこれを見つけたのは前日のこと、兄弟子でありこの聖杯戦争の監督者である似非神父からの召喚の催促の電話を受け、地下工房で先代であり父が遺したものを漁っていたときであつた。

「やっぱり、触媒になるようなものが無かったか……まあ、いいわ。形見の宝石が見つかったし、これを使えば、最優のサーヴァントであるセイバーを引き当ててみせるわ！」

そう自信満々に言って、儀式の準備を始めようとしてそこから離れようとしたときに運命が大きく変わる。

偶々、彼女の足が棚に当たってその棚が転倒してしまったのであ

る。当然彼女はそれに巻き込まれてしまい、置かれてあったものをその身で受けてしまったのである。これは彼女の家の遺伝というより呪いに近いうっかりが発動したのである。当初は悶絶していたが、すぐに復活しまずは八つ当たりをした。

「もう、何よ！！ 足がちよつとぶつかっただけで落っこちてくるなんて・・・もう嫌！」

ひとまずこう言って落ち着いて辺りを見回してみると、靴箱のようなものがあって、何と物が出ていなかったのである。それを取ってみると、えらく嚴重に封印されているので物は試しと解呪してみると、開ける前から感じるほどの神秘が見てとれてわかり興奮した。そして、開けてみると草臥れた足袋が入ってあった……

物をみて少々がっかりした凜であったが触媒としては逸品であり、何が呼ばれてくるかは見当はつかないけれども無いよりはましだと考え、今日の儀式に臨んだのであった。

だが今になってふと気付いたことがあった。何故自分の父はこれを使わなかったのか？よくよく思い出してみれば、一度開けられてまた封印された形跡がありしかも普通では届かない棚の一番上においてあったものである。父が結局誰の遺品かもわからないものを自分が使つて大丈夫なのだろうかという言い知れない不安が彼女を襲っていた。

かといって今更儀式の中断はできず、続行し終了した。・・・
・が、一向に英霊が出てこない。失敗という二文字が頭によぎったが、その懸念は上で破砕音が聞こえて雲散霧消した。

慌てて上にあがってみるが、ドアが開かない。どうやら、先ほどの衝撃でドアが歪んでしまったようだ。そうだとはいえない彼女は開かないことに苛立ちを募らせ、実力行使をしようとした。

だからこそ彼女は気付かなかった。ドアの向こう側には、彼女が呼び寄せた者が今か今かと待ちかまえていることに……その顔は、怒りに満ち得物である武器をいつでも出せる準備をしていることを

「いい加減に、開けっつー！！！」

と勢いよくドアを蹴りつけて居間に入ろうとした瞬間、肩にヒンヤリとしたものが乗っかっていた。そのことに瞬時に気付いた凜は目をあげた。

彼女の目の前には上は衣服を着ていないが、左肩には痛々しいほどの大きな弾痕が存在感を放ち、右腕は鎧と籠手を着け髪を紐で結んでいるがボサボサな野武士のような男が刀を突き付けていた。それだけなら彼女はすぐに何かを言うはずなのに、黙っていた。それは男の眼であった。かなりの迫力を有し、全てを叩き切ってきたかのような野獣のようであった。そして夥しいほどの剣気を放ち、その気に彼女は吞まれていた。全身をカタカタと震わせながらも彼女は理解をしていた。今何かをしたら、自分の命は一瞬に露となることを……

男は彼女が現状を理解したことに気付き、野太い声を放った。

「小娘エツツ！！ 聞きてえことがあるんだが、何で呼ばれたとき俺は空にいたんだ？ 訳を説明してくれるんだよな……」

それは有無を言わさないもので内容次第によつてはタダではすまないことが明らかであった。それが私遠坂凜とこの二週間の戦争のパートナーともよべるサーヴァントとの初コンタクトであった。

——これは史実と大きく異なる聖杯戦争——

——赤い少女が呼んだのは赤い弓兵ではなく、一介の侍——

——しかも彼は英霊の座についていない——

——本来なら 座についてもおかしくないのに——

—— 世界が彼をつかせることを許さなかったからだ ——

—— 認めてしまったら 世界を超える存在であることを認めるのと同じだから ——

—— だからこそ 封印しようとした ——

—— 剣と魂の物語を 世界の理を超えた存在を ——

—— 運命の物語に剣と魂の物語が交わる時 何が起きるのか ——

—— それを知るのは戦争の当事者だけ ——

—— 新たな物語が今紡がれ始まるのであった ——

第一話「召喚」（後書き）

妄想で進んでいきます。更新はまあ不定期になると思いますが、
がんばっていききたいと思います。よろしくお願いします。

第二話「現状確認」（前書き）

英霊の座についていないのに聖杯の情報が入ってくるようにしています。それは呼ばれたからだという都合のいい解釈をしています。また、説明文に近いので飛ばしちゃっても構いません

第二話「現状確認」

男の問いを聞いて答える前に、凜は男が言った言葉に反応した。

「ねえ、今あんた呼ばれたと言ったわよね？ 答えて！ 貴方が私が召喚したサーヴァントで間違いないのよね？」

男は呆れた顔をしながらもかったるそうに私の問いに答えてくれた。

「おいおい、レイラインが繋がっていることがわかんねえのか！？ とんだ小娘が呼んでくれたなあ！！」

それでよお・・・いつになったら答えてくれるんだあ！？ 自分が置かれている立場忘れちゃあいねえよなあッツ！！」

男は答えてくれながらも苛立ち始めているのか、問いに答えるよう催促のために持つていた刀に力を入れ始めた。元々肩に乗っていた刀がさらに沈み、ほんのひと押しをしたら自分の体が分かれることが明らかであった。

そのような状況の中でも私は、自分の肩に置かれている刀に目を向けた。銘は有名では無さそうだが、男の剛腕・蛮用に耐えたものが武骨ながらの美しさを持っていた。これが、男の宝具ではないのかと感じていた。刀を見ていることに気付いているであろう男は、そのときだけは剣気を発していなかった。まあ意図的に出さなくても、十分にダダ漏れしているけど・・・

色々と紆余曲折があったが、やっと私は男の問いに応えるべく目を見据えた。

「貴方を空に呼んでしまったのは謝るわ。けど、召喚自体には何の間違いも無かったし時刻も私が最も万全な午前二時だったし・・・」

「ちよつと待てィ！ 今の何時が二時なんだあ？ ここの時計を見やがれィ！！」

男の言葉に反応して私は、居間の時計を見てみると……それが指していたのは、午前一時であつた。

それを見て今更のことながら、私は思い出した。このところ地下工房を漁っていたため、わざわざ工房の時計を一时间早めていたことを（学校に遅れるわけにはいかなかったから）

その瞬間肩をガツクリと落とした。

「うわあ……やっちゃったあ……」

そう、またもうっかりを発動してしまったのである。もうこの呪いともいえるうっかりをなくすことを聖杯に願おうかと本気に思い始めていた。男はそんな彼女をもはや呆れを通り越したらしく、冷めた目でみつめながら刀を鞘に戻した。

男は原因について一応の決着がついたあとおもむろに尋ねた。

「なあ小娘……お前さんのうっかり具合はよく分かった。どうやら直る見込みもないことも今のやり取りで掴めた。だからこそ言いてえ……死合いのときにはなるべく何もしねえでくれ。重要な時にヘマをされちゃこっちが困るからな。マスターよ」

その言葉を聞いて凜は驚いた表情をその男に向けた。

「えっと、あんたは私のことをマスターと認めてくれるの？ あんたのことを空から落つことしたのに」

「まあな 最初は本気で叩き切つてやろうかと思つていたが、お前から供給される魔力は標準以上だったからな。切る気はさつさと失せたよ。ただな……性格が気に入らなければ、テメエをここに閉じ込めて一人ですべて終わらせるつもりだったがな。だがよ、俺の威圧を受けながらも俺を見据えて答えたその強さを認めてやるよ。この俺を雇つたことを後悔させないでやるよ」

サーヴァントに認めてもらえてひとまず安心したが、聞かなければならないことがある。

「ありがとう。……で？ 貴方は、何のサーヴァント？ 刀を差しているようだからセイバー？」

男はそのセリフを聞いて、視線を上を一時向けていたが、すぐに

チツと舌打ちをし不満気な顔を向けながらも普通に答えてくれた。

「本当ならお前の言う通り、セイバーになるのだから・・・チツ世界の野郎・・・どうしてもセイバーとして出したい奴がいるから、却下だとお・・・ふざけやがって！！悪いな、お前にしてみれば非常に不本意かもしれないが俺はアサシンのサーヴァントだ」

ただし、世界に向けて怨嗟の声を放っていたが・・・これを聞いて大丈夫なのだろうかと不安になった。何故なら、世界と非常に相性が悪いことが見てとれてわかったから。こんなんで勝てるのかしら・・・

ただし、その不安は彼のステータスを見て一瞬に消えた。主要な部分においては、最高クラスであり、保有スキルも何よそれ！！と思わず言ってしまうほどのものを持つていたからだった。ただし、宝具については虫食いのところがあり、そのことを聞いてみると、また不安になった。

「俺が忘れたわけじゃあねえぞ。世界としては、その名を出すことがとことん嫌なだけなんだろうな。安心しろ、使えるから気にするんじゃねえぞ」

「いや！ 気になるわ！！！ ねえ、どうしてあんたと世界はこんなに仲悪いの！？ 一体何をやったのよ！？」

「知るか！！！ まあ、知り合いのしつけえ忍者によるとな・・・ただ俺を含めた当事者がやったことが余程世界が気に入らねえようでな、どうやら世界の理を超えているんだそうだ・・・まったくこれっぽっちもそんなことをしてねえと思うんだけどなあ……おかげさまで英霊の座につけられねえしな、俺たち全員よお」

また、とんでもない爆弾をこいつは放り投げやがったから余計にヒートアップしてしまった。

「ちよっと待って・・・英霊の座についていないですってえ！！！ どういうことよ、サーヴァントは英霊の座についていることが

前提のはずでしょうが！！」

「小娘よ……俺を呼び寄せる触媒を使っただろう？触媒さえあれば、来れるんだよ。本来なら、英霊の座についておかしくないんだから全員……もうこれは世界の意地なんだよ。つかせないのはな」

とアサシンはため息をつきながら、ぼやくように話した。こつちがため息をつきたいくらいだわ！！

私がイライラを表現するように全身を震わせているのを気付いているのにそれを無視してアサシンはふと気になったことを聞くかのように尋ねた。

「そういやよお、マスターは俺の真名を本当に知らないみてえだな？　じゃなきゃ触媒を放っておくわきゃないか……」

今更のことを聞かれた。そう、彼の真名もまた虫食いになっているのだ。私は疑問に思いながらもそれに答えた。

「ええ、そうよ。ところでアサシン、あんたの真名は何なの？　見た格好日本の剣豪のようだし、もしかして宮本武蔵？　刀二本差していないけど」

それを聞いたアイツは無然とした表情を見せていた。

「武蔵だとお？　俺のどこが二刀流なのか聞かしてもらおうじゃあねえか！！　だいたい、あの野郎に負けるほど落ちぶれちゃあいねえよ！　そしてだ、奴はきつちりと伝説が遺されていて語り継がれていて英霊として登録されているんだよ。普通の奴らなら俺のことはさっぱり知らないだろうよ。語り継がれていないんだからな。だが、魔術師なら俺のことは知っているんだがな……なあ、お前の家は魔術師としてどれくらい経っているんだ？」

どうやら、コイツは武蔵より強いらしく生きた時代は十六世紀後半から、十七世紀にかけてのようだ。

「そうね……私の家系は魔術師としてはまだ若い方でまだ三百年も経っていないわよ。それってそんなに関係あるわけ？」

「ああ、大いに関係あるんだよ。三百年も経っていないければ知らなくて当然だよな。もっと古い家系ならば、俺の真名を聞いてすぐに

は出てこないだろうが、出てきたらまず間違いない驚くはずだろうよ」

「本当に何があったのよ？ 何で、名門にかぎってそういう恐怖する必要があるのよ？」

「お前ら魔術師は俺やアレに関わった連中のことを見つけ次第、『生け捕りにしろ』と言って、平気に魔術をボンボン使ってくるわ、伴天連の説教する坊主みたいなやつはやつらでよ、『主が定めた道より外れた者どもめ、我等の手によって道を戻してやろうアーメン』と言って、黒い鎌みたいなものを投げつけてくるわ、南蛮の知り合い曰く死徒という吸血鬼で、その親玉の死徒二十七祖とかいうやつは何だっけな・・・最初は幼子だったのに何か結界張ってから妙齡の女に変貌した挙句、『貴方たちは、私たち死徒以上の恐怖を与えるもの・・・死になさい！』と襲いかかってくるわ、その女が危機になったらなつたで、護衛役なのかでつけえ剣を持った奴が『姫様に仇なすものは、打ち払ってくれるわ』と攻撃されるわ・・・結構な目にあってたんだよ。まあ、死徒は退けることしかできなかったが、かなりの手傷を負わせてやったし、魔術師と伴天連の連中は返り討ちにしてやったな。本当にしつけえもありやしねえ」

とアサシンは過ぎ去った過去のことをただ鬱陶しいもののように扱っていたのを凜は啞然としながら聞いた。

（ちよつと・・・魔術協会はアサシンや関係者を捕まえるために執行者を動員して、聖堂教会は代行者を派遣し始末しようとし、それは二十七祖も同じ・・・それが全部失敗したの！？ どんだけ強いのか！！）

心の中で凜は魂の絶叫をしていた。己が呼んだ者がどれだけ異常なのかをはつきりと理解し本当に恐怖した。そういう状況下に置かれていることを知っているかを確認せずにアサシンはまだ話を続けていた。

「戻ってきたらきたで、七夜・遠野・巫浄・両儀といった異形の血を継いだ退魔の連中からは、『生身で異形を超えたお前を見過ごす

わけにはいかない。排除する』と何か目の敵にされてな、初っ端はともかく、無駄なのに攻撃してくるんだよな。返り討ちになっているけどな。何もしなかったのは神社や寺の系列の退魔機関ぐらいだったただけだぞ。理由がさっぱりわからねえけどな」

今コイツが言ったのは、日本の四大退魔の一族であった・・・もう自分の頭がパンクしそうになっていることを実感し、続きがあるのなら中断させようとした。

「ねえ、まだこの話に続きがあるのなら明日にしてくれない？あまりにも言っていることが私には重すぎて入らないから・・・明日にまわしてもらいたいのよ・・・分かる？」

多分今の私の顔はとびっきりの笑顔であるのだが、私から発しているのは殺意であるのだろうか、そのことを察知したアサシンは気にはしていなかったが話を終わらせた。

「いや、おおまかなことはだいたい言ったからな。その話に関しては何もねえよ。そうそう、俺の真名は御剣平四郎だ。よく、覚えておけい！マスターお前の名は？」

「ふうん・・・御剣平四郎ねえ。私は遠坂凜・・・よろしくね、アサシン」

アサシンとの会話で想像以上に疲れがたまっているのか、名前を言ってその足で寝にいった。

だから、すっかり忘れていたことがあった。召喚によって、屋敷の天井に穴があいていることを・・・

そして今が寒い冬であることを・・・

———
こうして私とアサシンの聖杯戦争が始まろうとした———

———
彼女は知らなかった この男がどれほど恐れられていたかを———

—— 名門であればあるほど、話にならず即切られていたか
もしれないことを——

—— 無知によって命が助かったことを——

—— そのような中で聖杯戦争はどうなるのか——

—— それを知るのは今誰もいない——

第二話「現状確認」（後書き）

やっと二話目ができました。次はステータスを投稿します。
読みづらいかもしれませんが、その点ご容赦を

ステータス（前書き）

やっと、ステータスが出来上がりました。御剣が強くなりすぎてしまいました。これは、本来セイバーと呼ばれなかった代わりだと思ってください。

断っておきますが、この作品は自己満足のためです。

本当に気に入らなければ、読まなくて結構ですが、感想を荒らしに使わないでください。

ステータス

クラス：アサシン

マスター：遠坂凜

真名：御剣平四郎

性別：男性

身長：171cm

体重：65kg

外見：ソウルキャリバー4のイラストを参照してください

好きなもの：強敵との死合い

嫌いなもの：細かいこと（雑務みたいなもの）

天敵：タキ（つけまわされることに対して）

属性：中立・中庸

能力

筋力：A+ 魔力：C

耐久：A 幸運：C

敏捷：A 宝具：C } EX

スキル

気配遮断：C

サーヴァントとしての気配を断つ 魔術師には攻撃する瞬間までは

気付かない

対魔力：C

生前、魔術師・神父・死徒の戦闘を多くしたことによる恩恵
ただし、大魔術などは防げない

対呪い : E X

対魔力とは別に呪いという呪いを全て無効とする

これは己の力で

- を屈服させたことによる

令呪の強制命令もこの呪いに含まれる

直感：
A+

戦闘時、危険を察知する力

相手サーヴァントが同じくこのスキルを所持している場合、相手よりクラスが上回っているときは相手の予測を覆すことが可能

見切り : A +

強敵との数々の死闘を行って手に入れた

どのような状況下でも相手の攻撃を見切り斬りかえす

本気になると相手の攻撃を最低限の動きで避け、その際あまりの素早さゆえに残像が発生し、その勢いのままに攻撃が行える。この攻撃を対処できるのは高位の直感スキルが見切りを持つ者のみ

また、このクラスになると相手を消滅させないギリギリの攻撃も可能

心眼（真）： $A +$

鍛錬や死合いの中で培った、戦闘を有利に進めるための洞察力。このクラスになると、勝率が一切無くても勝率を引っ張って来ることが可能

鑑定眼：
A

旅をしていくなかで新調または手に入れた得物を見たり、数々の戦士たちとの死合いで身に付けたもの

人や物の真髓を見極める

威压：
EX

世界を超えた業を成し遂げたことによる

何もしないでも漏れ出している剣気と闘気によって敵・味方を問わず己に呑みこませてしまう

このとき、意識を強く持たないと一瞬の内に気絶する。また、心弱き者は動けない。

戦闘時は意識して出しているので、この場合更に相手の筋力・魔力・敏捷を2ランクダウンさせる。

また、スキルのランクも1ダウンする。ただし、相手の緊張がほぐれると元に戻る。

得物を抜いたら更に放出される量が増えるため、敏捷の値は-補正される。

これを無視できるのは彼と同じ当事者が主神クラスのみ

弾除け：A

元々彼がこの物語に出てきた理由は種子島を超える武器を求めるためであった。

それを求めに大陸に渡り、欧州各地での戦闘を傭兵として参加して大砲を用いての砲撃戦を経験

そのため、本来なら広範囲攻撃や長距離攻撃に補正がかからないはずなのに対処が可能

斬鉄：A++

剣豪が持つ特殊スキル

ありとあらゆるものを斬るということが概念化した。具体的には、このクラス以下のどんな事象も宝具ですら斬ることが可能、ただし時間はかかる。

また、結界も斬った部分だけ穴を開けることができる。

異形殺し：C

死徒や混血との戦闘を多くこなしたことによる恩恵

人でないもの（幻想種）や混血との戦闘に際し、筋力・敏捷を1ランクアップする。

単独行動：Ex

彼は死後、肉体を失ったあともずっと現世うつに居続けた。英霊の

座につけず、輪廻からも外された彼は、死後も自分の亡骸を取ろうとした者たちを返り討ちに続けた。返り討ちにした際、実体化をしていたことから、マスターの魔力提供がなくてもずっと現界可能。斬撃破

己が纏う闘気と剣気を刀に乗せて豪力で振り切るとその振った方向上のものを破壊する遠距離攻撃。気であるから、空にも向けられる世界の干渉

彼の存在を嫌う世界が行う干渉

具体的には彼と敵対するサーヴァントに対し、彼との戦闘時に限り全ステータスを1ランクアップさせる

また、彼を倒せという命令を本能に伝える。敵サーヴァントのマスターにも魔力量を増加させる恩恵をもたらす。

宝具

刀：C（E）x

彼が生前手に入れた刀そのものが宝具。戦闘時、刀の変更は可能。それぞれの性能及び特殊能力は出てきたときに説明する。

第三話 前篇（前書き）

やっと更新できました。本来だったら一話でまとめるつもりだったのですが・・

長くなることが明らかに、自分自身長いのが嫌いなので分けました。まったく話が進んでいませんのでそのことは申し訳なく思っています。すいませんでした。更新は今後遅くなると思います。駄作、愚作と呼ばれるであろう作品だと理解していますが今後もよろしく願います

第三話 前篇

翌日……朝、凜が起きてまず感じたことは寒いということだった。そこで、自分の部屋の窓を見てみたが窓は開いていなかった。どうして寒いのかという理由が頭のなかで渦巻いていながらも、ドアを開けて居間に向かおうとして、それを見た。

居間では、一介の侍が刀を抜いて正眼に構えていた。彼からは溢れ出るほどの気が発生していて、何ものも音を発してはならないという雰囲気ので、屋敷全体が静かであった。状況を固唾を飲まずに見ていた凜はふと、コイツは誰だっけと口に出したら間違いないと斬られることを考えていた。そんななか、彼は刀をまずは縦に振った、しかも恐ろしい速さで上下に切っていた。今度は横に連続の薙ぎ払いをし、次に正眼のままで手首だけを動かして突いていた。それが終わると、刀を鞘に戻しすぐに横・縦の順で斬る居合を行った。居合が終わりやっと鞘を床につけ、刀を戻した。この一連の動作が終わると、私を見て

「よお、マスター。遅かったな目が覚めるのが」

マスターと言われて、やっと思い出した。この侍が私が呼んだサーヴァントであることを。それを今の今まで忘れていたことを。そんなことを気付かせないように私はついでに気になったことを尋ねることにした。

「ええ、おはようアサシン。聞くけど今何時？　そして何でこんなにここは寒いのかしら？」

そう、ここは私の部屋より段違いに寒いのだ。寒い原因はここにあるのではないかと睨んでいた

「そうだなあ……日が昇ってからはおおよそ二つ時がたつたくらいか。寒いかって？　おいおい、テメエが招いた原因だろうが……アレはよお」

とアイツは、指を天井に指していた。私はその指している方向に

目を向けると、そこは穴が開いていた。穴を見て、自分の失敗を思い出して何もせずに寝たことを後悔していた。後悔から立ち直ると、まずは確認をした。

「アサシン、あんた私が寝にいつてから一体何をしていたの？」

「何ってよお……マスターが寝ているとき敵が来るかもしれないから、警戒してただけだ。まあ、落つこちて出た瓦礫は邪魔だったから片づけた程度だが、そのどこに問題があるんだあ？！まさかなあ……。テメエのヘマ棚に上げて俺ばっかに責任を負わそうとしているんじゃないやあねえよな？！！」

「……鋭い。そう、上手く口で丸めこんで天井の補修を含めて全てやらせようと目論んだが、察知され逆に殺気をこちらに向けられてしまい追い詰められていた。冷や汗をかきながらも、凜は

（何で私が呼んだサーヴァントにこうも睨まれる思いをしなくちゃならないのよ！！）確かに私が悪いけどだって、業者呼んで修理してもらうのはお金がかかるのよ！ただでさえ、魔術を使うのにお金がかかるからサーヴァント使って何が悪いのよ！）と内心で叫んでいた。

——どうみても自業自得ではあるのだが——

「ま、まさかそんなつもりは無いわよ。見張りしてくれてありがとう」

そんな内心を悟らせないようにしたつもりだったが、アサシンにはお見通しのようで、これに対する返答として殺気が更に増えていて、逃がさないのは明白だった。ことここまで追い詰められた私は最終手段である令呪を使おうとしていたが、重々しく彼は言った。

「小娘エー！！自分の非をさっさと認めやがれ！誤魔化そうとしても無駄だ。あとこんな阿呆なことに何を使おうとしてやがるんだ！？俺のスキルを忘れてちゃあいねえよなツ？」

危なかった……コイツには対呪いExというんでもないものがあるって、令呪による強制命令でさえ無視できるんだということ。私が危うくうつかりを発動させようとしてそれを結果的に

止めてくれたことに感謝したかったのだが、今は無理であった。

どうみても、私が悪いのは明白で覚悟を決めて謝って見たらアサシンは

「マスターよ……あんま誤魔化すのはよくねえな。バレたらさつさと謝る、これは鉄則だ。おめえのことが信用できなくなつてよ、勝つ戦が勝てやしねえなんて笑えねえからな本当によお。あとな・勘違いしているわけじゃねえと思うが、コイツは戦だ、甘いもんじやあねえ！　少しでも齟齬があつたらすぐにでも負ける・即ち死にも繋がることにもなることにもなるんだということを頭だけでなく、体で実感したほうがいいのか？　俺をガツカリさせないでくれよな……さもなきゃすぐに死が待っているぞ」

私は反論したくともできなかった。なぜなら、アサシンは私よりはるかに死線をくぐりねけた兵でその経験からものを言っているのが理解できたから。そして、信用できなくなれば即座に自分を動かなくさせて勝手に戦争を戦い抜くか、あるいは殺して別のマスターのサーヴァントになるかの二つに一つしかないことをわかってしまった。高潔さんなんかを持ちあわさず、勝つため・生き抜くためなら容赦をしないが、己の生き様・進んだ道程に何の迷いも無く戦乱の時代を渡り歩いた傭兵、それがアサシンであることを。

私は身構えていた・アサシンが何かをすると確信していたから、自分が信用を壊そうとしていたのだから。ところが、アサシンは「まあ、テメエに対する説教というガラにもねえことはこれぐらいにしといてだ・……ちやっちゃと終わらせるぞマスター……日が暮れる前には終わらせたいだろう？」

……何を言っているのか最初理解できなかった。

「へ？　何を終わらせるの？」

思っていたことを思わず口に出してしまうほどに。それを聞いてアサシンは呆れた目を見せた。

「おいおい、オメエ自身言つてたじゃねえか……寒いって。俺は至

るところで野営や野宿経験しているから、この程度の寒さなんぞ平気だがそっちは別だろうに・・・冷てえ風運んでくる原因である穴塞げば大丈夫だろうが。さらにだ、これが補修できれば拠点としての価値も取り戻すだろう。大体魔術師の家は城みたいなもんだろうが、それともそんなことを一切してないとかそいうフザケタことでもしてんのか？ 補修をするんだというなら手エ貸すつもりなんだが・・・どうなんだ？」

・・・どうやら、心証は悪くしたようだがまだ認めていることがわかって嬉しかった。だからこそ戒めなければならない、信頼をブチ壊すことをしてはならないと

「ええ、とつとと終わらせるわよアサシン。元通りは無理だけど穴は塞ぐわよ！」

「よしきた。あと小娘よ・・・言っておくぞ…………この年で魔術師たろうとする姿勢は見事と言える、才能も畑違いな点から見てもあると見る。だが・・・自分の感情は素直に出したほうがいいぞ、まだ若いのも事実なんだからな。誤魔化しちまったら、取り返しのつかねえことをする年なんだからな。二度は言わねえ！ 誤魔化すな！！」

・・・凄く重い一言であった。まるでそのように陥った者を見たかのようにだった。

——少女はまだ知らなかった 素直に出さなかったことを後悔することに

——後悔あと絶たずということはその通りであることを痛く実感する羽目になるのであった

第三話 前篇（後書き）

次の話は街を巡る予定です。ここで凜は重大な決定を下してしまいます。本人は思っていないでしょうが、御剣にしてみれば重要なことだったのです。では、次回を楽しみにしてください。

第三話 後編

穴の修復は思いの他早く終わらすことができた。何故なら、アサシンが意外と協力的でその身体能力を思う存分発揮してくれたからだ。特に夜の内に瓦礫の撤去をしてくれていたから穴塞ぐだけで済んだことが響いていることはよく実感している。作業が一段落してから、アサシンは

「やっぱやるじゃあねえかマスターよ。こんな早く終わるとはな……でだ、このあとどうするんでい？」

戦争が始まっているから敵探すか？ それとも屋敷しうに籠こもつての迎撃の準備でも始めるのか？ 軍略（戦略）を言ってくれ」

……その目は、これより自分が参加する戦を楽しみにしているものであり、戦陣の只中にいる兵のでもあった。これを見て、私は自分がその戦争にようやく立ったのだということに自覚した。そして、自分がそんなことに気付かなかったことに内心青ざめていた。そう、やっと今まで一族が追い求めていたものを手に入れる立場にただ立っただけなのだ。これから、残り六組を蹴散らしてそれを手に入れるための戦争に勝たなければならないのだ、その準備をするのが今からだという失念は痛かった。

その内心を立て直して、私はアサシンを正面に見据えて答えた。

「そうね……まだ、全てのサーヴァントは呼ばれていないわ。残る枠組みは一つ、あなたが本来呼ばれるであろうセイバーのはず……」私が全てを言う前にアイツは

「ってことだと残りは全て呼ばれているんだな。楽しみだな……連中との死合いはなあ！ それとだ、俺の代わりに剣騎士セイバーとなつた奴がいるんだ。それなりの腕があるはず……待ち遠しいな。さてと、セイバーを殺る前の慣らしをしねえとな……」

コイツは強敵つわものとの戦闘しあひが生きがいの戦闘狂であることを見せてく

れた。・・割り込んだことに腹を立てながらも、このままだと敵を
探しにいきそうなので釘をさしておいた。

「待ちなさい、アサシン！ 言おうとしてアンタが割り込んだから
言えなかったけど、全てのサーヴァントが呼ばれるまでは開戦とは
いかないのよ。だから、威力偵察は無しよ……まあ、向こうから仕
掛けられた場合は別よ。その時は、返り討ちにしないさい。でも、こ
のまま何もしないわけではないわ。案内するわ、貴方と私が組んで行
う場所^{せんじょう}をね。それでどうかしら？ 今日のところは」

この解答^{ほつしん}を聞き、アサシンはホウと声をはいていた。

「なるほどな、そうなると会敵開戦ということになるな。籠城戦は
する気が無いということか。ところでだ、この戦は何日間やるんだ
？ 言いようから察すると、そんな長くは無さそうだが？」

「いつまでやるのかというルールは存在していないわ。ただ、今ま
での戦争が三週目には終わっているのよ。それとね、屋敷^{しゅう}に籠ると
いうコソコソした戦い方は好きでもないし、一族の家訓の『常に優
雅たれ』に反していると思うの、それが理由よ」

それを聞いた時アイツは呆れたらしく、ハアと大きく息をついた。
「魔術師という連中は誇りが無駄に高えとは知っていたが、なんな
んだその家訓はよお。今までのテメエの言動からはそんなのから真
逆なのが大量にあるんだが？ どうなんだ、そのところは？ むし
ろ、碌なモンを残してくれたと内心思わねえのか？」

私はムキになって、反論した。

「魔術師としての私と、ただ一人の私と使い分けているの、それも
常によ。それを忘れさせないためにいい家訓だと思うわ。」

「そうか？ 俺からすれば、単に世間体気にしているようにしか見
えねえけどな・・オメエの家系向いてなかったんじゃないか？ 影
日向になるのが嫌だったんじゃないか？ あねえのか？ こ」

「黙りなさい！！！！ アサシン！！！！」

今度は私が彼が全てを言わず前にガンドをブチこんだ。彼が言お
うとしたことは、間違いなく魔術師たろうとする私を否定するもの

だから。それは、今までの苦痛や意思を無視し許せないから。いくら、あり得ないスペックを誇るアサシンであっても全力でのだから効くと思っていた。だが、それは思い上りでしかないことをすぐに察した。なぜなら、刀が首筋に突き付けられていたから。そしてアサシンは、馬鹿にしたような眼をしていて、傷一つついていなかった。

「小娘よ……怒り狂うのは当たり前だが、少しは状況を冷静に理解しろ！ 今のテメエの魔術は呪いの一種だろう？ 俺の特殊スキルをいい加減にわからねえのか！！？ 無駄だっ！！ テメエのうっかりで死にてえのかっ！？ 俺はいつでも見捨てることができるんだよ。このままだと、命がいくつあっても足りはしねえなあ！
！ だが、オメエを他の誰かに殺されるのは気が引けるんで……
今俺が引導を渡してやるぜどうなんだあ？ ああっっ！！」

……このセリフには嘘は無く、迷わず首を刎ねられて死ぬことは明白だった。だからこそ、この殺意に屈してはならないと理解でき、こちらからも睨み返していた。それが長い間続いたように思えたが、

やがて、アサシンはケツと言って刀を離してくれた。だが、体力といい精神力を消耗したため、そのまま私はペタリと床に座り込んでしまった。そのザマを見ても、アサシンは何も言わなかった。やがて、アサシンが口を開いた。

「ふうむ……とっさのときの判断は悪くねえが、甘いな！ 若いから、感情が先走ることを理解したほうがいいぜ、じゃなきゃ今みたくになるぞ。あとな、呪いは全く効かねえがさっきの一撃は結構こたえたぞ……アレ以外だったならそれなりの手傷を負わせられるぞ。そのことは誇りに思え！」

それなりに賞賛してくれて、嬉しかった。だが、それだけでは終わらしてくれなかった。

「けどな、次はねえぞ……そのときは死しかないとをよく肝に銘じておくんだな！ わかったな？」

さて、回復したら物見にいこうじゃあねえかマスターよ」

今はまだ主と見るつもりのようなだ……何とかして令呪では無い別の何かで縛るものを見つけないと……さもなければ、自分が呼んだ使い魔サイヴァントに殺されることがまず間違いないから。そして、コイツは一体何をやったのかを探らないと……

霊体化して私の隣についてきていたアサシンに街を案内していると、感嘆の声を出していた。その理由を聞いてみると、

「なあに、今の時代はちよつとした城のような高い建物を平気で当たり前のようにあることに凄えと思ったんだよ。それも、鉄でできていることにな……アノ野郎が未来を視たいと言ってアノ行動を起こすのが納得できたんだよ」

どうやら、アサシンの知り合いであることはすぐに理解できたが聞かないことにした。コイツの知り合いだから、とんでもない人だと認識しているから。

——まだ、彼女は知らなかった。その知り合いと会うつことに——

——そして、その認識は間違いでなかったことに——

街を歩いている中で、ふと私が足を止めたところは公園であった。そこから出てくる異様な雰囲気を感じてかアサシンが尋ねてきた。

「マスターここは何なんだ？ えらく怨念や無念の相で一杯なんだが？ しかもだ、離れたくとも離れられねえようだが？」

「ええ、ここは前回の聖杯戦争の最終場所だったそうよ。そして、その時大火災が発生して数百人という人が死んだの。復興した時にこの中心地は公園ができあがったの」

それを聞いてアサシンは右手をアゴに持っていき、何かを考えているようだった。考えがまとまったのか、

「なあ、確かオメエの家系ってこの地の霊地の管理をしているんだよね？ だったら、何でここの穢れを被わないんだ？ こんなのが

あつたら、いいことなんか起きないのに何故なんだ？」

その問いは私をうつと詰まらせるものだった。それは、間違いなく自分の怠慢なのだから。でも、正直に答えた。

「前回の聖杯戦争は十年前に行われたわ。そのとき、私の父は参加して帰って来なかった・・・それに後追いするかの様に母は発狂し、過去に囚われたわ。幼かった私は父と同じく参加し生き残った父の弟子だった神父に支援してもらって今まで生活してきたわ。当然その間は兄弟子にあたる神父がこの地の管理を代行してもらっていたの。今ようやく自立できるところまできて徐々に返されてもらっているところよ。しなかったことについては怠慢であることを認めるわ。この聖杯戦争が終わったらすぐにしないとね。それが冬木の管理人たる遠坂の当主としての初仕事ね」

「そうか・・・すまねえな。だとしたら、その怠慢は兄弟子に向けられるな。大体、^{キリスト}耶蘇教の説教する奴だろうが、こういつたことをするのが当然なはずなんだが・・・もしかして、ソイツは墮落した奴か？ 俗に溺れた？」

「いいえ、そういう方ではないのよ。むしろ、立派なんだけど、どうしたら神父になれたのかと気になるほど人格破綻者といっているのよ」

「おいおい・・・自分の兄弟子をそう扱きおろしているのか？ 余程似つかわしくないのは理解できるが・・・そんなのが監督やっているんだらう？ 本当大丈夫なのか、寝首かかれないうなあ？」

「今更ながら、そのことをこれっぽっちも考えて無かったわ。でも、アサシン、あんたがいるから何とかなるでしょ。あんたに勝てるほど綺礼は強くないわよ」

「なあ・・・過信はしないほうがいいぞ。俺なら勝つためなら、お前を真つ先に狙えば済むことの話だ。大体俺は何時でも裏切り・・・ではなく、あんましひどかったらどうなるか分かっているはずだ！ とは言え、ソイツにはつかないと思うけどな・・・自分で見てねえがなあ。ハッハッハッ！」

「……笑いながらも、コイツは私に警告していた。油断・慢心はするな、使えないと判断したらこの契約から自分は降りるということ」

日が暮れて街が闇に覆われていく頃、凜は御剣を連れて自分のお気に入り新都のビルの屋上にいた。

「どう、アサシン？　ここからならこの冬木を一望できるわ。私はここを気に入っているの」

「……確かに、全てを見渡せられるな。そして、お前の内心がつかめたぞ」

何か、とんでもないことを言ってくれて聞いてはならないと本能は教えるが、つい聞いてしまった。

「へえ……どういうことよ？　聞きたいわ」

「なあ、オメエさあ……自分でも分かっていないだろうが、自分以外の全ての奴を下だと思っているんだよ。優越感に浸っているわけじゃあねえが、上から見下ろす、それが好きなんだろう？　下手したら、優越感より性質^{タチ}が悪い。そして、テメエの口から出てくるのは責任だの、義務だのという系統、どうみても上に立っている者からいう言葉だ。そんなんだとよ、届かねえぞ、本当に伝えたい言葉はなあ。何故なら、言い方からすでに相手に鎧を着けさせる。当たり前だわなあ、そんなの聞いたらよ……信用できねえよ。お前ん家の家訓はそんなのも引き起こしているんだよ。何が優雅だ！　ただ上に立ちたいという気持ちを綺麗にまとめただけだ！　今のままだと魔術師としてはいいが、人間としてはカス、いやクズになるぞ。一端の者になりたいのなら、これだけは忘れるな！！　本音を言うときは、素直に言え！！！！　言葉を飾るな！！　そして、飾って逃げな！！　さもなきゃ、引くに引けない時取り返しのつかないことになるぞ、これは断言できる！！」

「……今度は反論できなかった。自分では内心の奥底が分からない

いから。そして、最後のほうは家でも言われたことだから。でも、それが事実かもしれないでも素直に認めたくなかった。その代わり、黙っていた。その態度に苛立っているのかアサシンは大声を出した。「おいっ、小娘エッ！！ 何故、反論すらないんだあ？！ どうやら、言葉にできていないんだろうが、それはすぐに出すことだな！！ オメエの人生に直結するんだからな！！」

言われた言葉に対する自分の答えを探しているので、気付かなかった。自分が見られていることに。

その帰り道、見知った顔を見つけた凜は慌てて横路に隠れた。

『どうしたんだ、凜よ？ いきなり、隠れてよお』

「黙ってなさい。あそこにいるのが知り合いなの、あんまり会いたくないの。」

そこには、見知った後輩と見知らぬ金髪の外国人がいた。

『どっちが知り合いなんだ？ 金髪の方だったら付き合いやめたほうがいいぞ、あれはお前の悪いところ（傲慢さ）を悪化させる存在だ』

「女の子の方よ。金髪の方は知らないわよ。それに何が悪化させるのよ！」

彼らが立ち去ったあと、アサシンが実体化し徐に尋ねてきた。

「正直に答えろよ、マスター。なあ、あの女お前の縁者だろ？ 今の感じからすると触れたら壊れそうな関係の様に見えたが、何故なんだ？ 誤魔化そうとしても無駄だ、俺の鑑定眼に狂いはねえぞ。仲良くすればいいじゃあねえのか？」

コイツの鑑定眼というスキルを恨みたくなかった。話したくなかったから、自分と彼女の関係を。でも、バレているのだから話さなければならぬ。それを無視したら、間違いなく殺されるから。

「あなたの言う通り、彼女は妹よ。父が養子に出したのよ。名前は桜よ」

「ちよっと待ちな、養子に出すほどお前の家は貧しくはねえとみた

が、どうしてなんだ？」

「……しつこい。何故サーヴァントなんかに自分の家庭事情を話さなければならぬのか？でも、答えなければならぬ。アサシンはこの戦争に勝つために不安材料を無くしたいということから聞いているのが分かっているから。そして、気になることがあった。アサシンは何を望んでいるのかを聞いていないことを

「そのことについてきちんと答えるわ。その前に、御剣平四郎、貴方はこの聖杯に何を望んでいるのかそれを聞かしてもらえるかしら？ それを答えて欲しい！」

それを言った時、アサシンはしまったという顔をしていた。

「いけねえなあ……言うのが忘れていたぜ。俺は強敵との死合いを望んでいるだけだ。何せ、知り合い以外と殺り合っていねえからな。座についている英霊たちがどれだけ強いかわからねえし、それを楽しみとしているんだよ！聖杯に望むものは何もないぜ……」

「……ただ、それが具現されればいいんだからな」

コイツはやはり戦闘^{バトルマニア}狂であるだけなのがわかった。最後の部分は呟きのようなもので聞きとれなかったけど……

「こつちが答えたんだから、マスターも答えやがれ！」

向こうが話したのなら、こちらで話さないと等価交換の原則に反するから、養子についてのことを知っている限り話した。一通り話して、内容を理解したのかアサシンは出している雰囲気を変えて私に問うた

「小娘……これから誤魔化して通そうとしてはならないことを聞くぞ。妹さんを出した家に関わってならないという盟約を姉としてどう見てやがるんだ？ 大体、最後の縁者なんだろうに。妹の幸せを望もうとする姉が何故コソコソして見守らなければならぬのかということをナントモ思っただけなのか？」

「……重いものだった。確かに、いつも彼女を見るときは赤の他人として振るわなければならぬことに対して歯痒いものがある

るのは事実だ。しかし、私家が継ぐことによって彼女が普通の生活を送っていける、そう信じているからこそ耐えていけたのだ。魔術を行うことで生じる苦痛に。言葉としてまとまるまでもう少し時間がかかったが、彼の問いに対する答えを言った。

「ええ、そのことに対してナントモ思わないわけがないでしょう！でも、私が遠坂を継ぐことで彼女は魔術とは縁がない生活を送っていけるのよ！姉としては魔術を学ぶことで生じる危険がなくなり、継がないことで失わずに済んだものがある、それは日常の生活よ！！それを守るためなら関わってはいけないというのは間違っていないと思うわ！私と関わることで奪ってはならないものを奪ってしまう恐れがあるのなら、私から歩んではならないと思うの。彼女が幸せな日常を送れている、それがわかつているだけで十分よ！」

自分なりの答えを言っている中、一瞬だけ周りの空気がこれ以上ないくらい冷え込んだが、彼の表情を見てみるがただ驚いた顔をしていた。

「ホウ……その年でよくそこまで言えるなあ。感心するぜ（魔術師としては）。だがな、次会った時には令呪があるかどうか見るのは罰じゃあねえと思うぜ。本当に関わっていないことを立証できるんだからな！命に関わって無いことに対してはマスターの意見を尊重するぜ、何せ俺はしがない傭兵だからな……………バカ過ぎる、……………」

見捨てよう」

珍しく、あまり怒らなかつたけれども、釘を刺すのを忘れなかつた。そう、確認すればいいのだ。それで気が晴れたために自宅への帰路に向かつていった。

……………だからこそ、彼の呟きに気付かなかった。それは、自分の生死に関わることであったのに。

家に着き、凜が寝に入つたのを確認すると、彼は公園に向かいその中心に立っていた。そのときの表情は、今までになく冷めたものであり、侮蔑・呆れてもいたものだった。そして、殺気をこれ以上ないぐらいに放出していた。

「小娘………処置の仕様がねえわ、それは思い込みだということが分かっていねえな。綺麗なままでいられてるだとお、どこがだ！……！ 大体、魔術師の家に送り込まれている時点でそんなわけねえだろうが……！ アホウめ……！これじゃあ浮かばねえわ……あの妹さんの傍で守ろうとしていた誰かだかわからねえ亡霊にな……！ オメエに期待していたんだよ……！ それすら、踏みにじる発言しやがって……！普通の生活を送っているのなら、どうして髪と瞳の色が変わるんだ？ てことが分からねえんだな………どうみたって弄くられているに決まってるだろうが……！ それを分かうとしないアイツにはほんと愛想が尽きるわ……！！ 姉としてだとお？ 現実を認識してないだけだろうが！ おかしいとか何とかしたいという類なら、見えたこと話して手伝ってやろうと思ったが、もう知ったこっちゃあねえ……！ むしろ、行き着くところまでいかしてやったほうがいいのか？ 例の計画だけを完成させることにするか……邪魔するなら誰だろうと容赦しねえ！全員討ち果たすまでのことだ。「ま、待ってくれ……ん、誰だ？」

自分が悪態をついている中で、突如別の声を聞き身構えていた。すると、彼が視線を見据えた先には立っているのがやっとなんていうなりをした青年がいた。それを見た御剣は身構えを解いていた。

「ホウ………さっきの亡霊じゃあねえか。何しにここに来たんだ？ ほつといていいのか、体の中にある蟲に魔力・生命力を奪われ壊れている状態の娘をなあ？……」

「剣と魂の物語で鬼神・剛剣無頼などと謳われた貴方をお願いだ……！ 頼む、見捨てないでやってくれないか？ あの二人が殺し合いをするなんて見たくないんだ……！」

真摯な言葉であり、土下座するのですら難儀な体であるのにやつ

てのけたその姿勢に哀れさを感じたが、御剣は彼のなかでは非常に丁寧^{テイネン}に答えた。

「いや、悪いが俺は関わるつもりはない。いくら、オメエの言葉が本当に気にしているものであっているのが分かっているけど、こればかりは曲げられねえな！ アイツらの実の親父以上に人としてまともで、幸せを願っている養子先の家の者よ……」

その答えを聞いて絶望の表情を浮かべた青年であつたが、それでも諦めないのか、御剣の傍に近づきその手を掴んで絶叫した。

「どうしてなんだ？！ あの物語で謳^{ウタ}われた人達で彼女の現状を分かっている利用しようとする者とは違い、また人となりが善の者とも違うが、貴方はこのふざけた戦争に勝つためなんなんでもするよ
うな人のはず……なら、分かっているはずだ！！ このまま放置していたら、どうなるかぐらい……まさか！ 頼む！！ それだけはやめてくれ！」

彼の狙いに気が付いたのか、ただでさえ体調が悪そうなのにその顔を青ざめていた。彼の手を力を入れずに振りほどきながら、御剣は答えた。

「あのな……あそこまでいっていると両方……特に俺のマスターの方がまずいんだよ。今のままだと、本気で責任を盾にしてな、救いようもないことを仕出かすのが確実なんだよ。妹のほうは感情の爆発で全て無くすだけだろう？ そっちのほうはまだましだ！ だったら、本音をぶつけ合わせてやらなきゃどっちとも救えねえよ！！ 姉は感情を家訓や一族の誇りで誤魔化している、妹はお前のところでの苦痛によって動くことをやめた生きた死体と化している。当事者でどうにかしないと解決^{サーヴァント}できねえ問題だ。もし、これを何とかすることが出来るのは俺ではなく、この二人をつなぐ誰かだしが無理だ！
それが誰なのかは知らないけどな。俺やアイツらだと壊すことしかないぞ、断言する！」

その答えを聞いて、青年は立っていられなくなった。自分では何一つできないことに対して悔しいのがよくわかる。

「ところで、お前は間桐の者だと分かるが何もんだ？」

「僕は、間桐雁夜。今より十年前の聖杯戦争のマスターだった男だよ。ところで、何故貴方が僕の存在に気付いたのですか？呼ばれた英霊たちは気付いていないの？」

「もう、呼んでいるのは知っていたが、やっぱり参加しているんだな。その理由は俺の成り立ちにある。俺やアイツらは全員、座についていないんだよ。死後、ずっとこの世界に留まらされている亡霊だからだよ。だから、他の連中とは違って彷徨う霊が見えちまうの。ところで、前回の戦争について教えてくれないか？知っている限りのことをな！あと、一応想像はついているがなされたことについてもな！嫌でも言え！！」

「……聞いたあと、御剣の表情は怒りを通り越したものとなった。気持ちの整理がついたのかやつと声を出した。一方しゃべった側の雁夜も誰にも言えずの生活を伝えることができて、良かった半面言ったことに対して益々悔恨の念を浮かべていた。

「何だよ、十分他人を踏みにじってやがるじゃあねえか。しかも、姉以上に性質が悪すぎるわ！！似てはならないことが似やがつて！この場合だと、浄化とかをする連中でも手エ出さないわ。己自身変えるというぞ、絶対エ！……まだ、分かんものがある、何であの娘の心臓にある聖杯が真っ黒なのがな！そして、前回のアーチャーが未だに現世にいることもな！」

このセリフに聞き捨てならないものがあつてか雁夜が激昂した。「どこがなんだよ！あの子は、桜ちゃんはただかわいそうなことにあっているだけだろう！その彼女が誰を踏みにじっているんだよ！」

呆れた目を向けながらも答えた。

「オメエは娘の方しか見て無さすぎだ！！オメエから見たら、クズの行動かも知れねえけど、実の甥の方がむごいぞ！ただ、まとまっていなかったぞ……言いたいことがな！意見がまとまれば、納得できるものとなつてもしかしたら、穴を開けることになるかも

な……言いたいことが終わったなら、失せる！！　ここの掃除をするから邪魔だ！！」

これに反論したかったが、有無を言わさないものでありおとなしく帰って行った。

離れたのを確認するとアサシンは、刀を徐に抜いた。その刀からは異様なほどの邪気や妖気が辺り一面に漏れ出ているほどで、これがただの刀とは呼べないものであることがはっきりわかる。その刀は柄がすでに血で塗られており、その血は年月がたっているのに赤々とした色だった。刀身も然りで、しかも至るところが出っ張っており、到底刀とはいえないものであるが、そこから発する気に魅了されてしまうほどであった。しばらくすると、その刀に向かってこの公園にいた怨念が呑み込まれていくのがわかる。それが一段落すると、刀を鞘に戻して呟いた。

「さて、計画どうするかをアイツと話さなきゃいけねえ。そして、聖杯の裏事情も聞かねえとなあ！」

そう言っ、彼は闇の中へ消えていった。そして、その公園は怨念が無くなったが邪気で溢れていた

彼女の決断は問題を悪化させるものであった

上手くいけば　解消できたはずなのに

計画とは何か　彼らは何を思っているのか

戦争は始まったばかり　やがて明かされるだろう

剣と魂の関係者の狙いを

第三話 後編（後書き）

まだ、学校での戦闘はしません。打って変って次回は、他サーヴァントの現状とある方の話です。今を生きている彼と最初の打ち合わせを御剣が行います。

幕明 「動きし者たち―密会―」 (前書き)

この場で言うべきではありませんが、祝！！！ソウルキャリアー5
製作中！！

ですが、今作にはいれるつもりはありません。4までの設定で進めます。

また、申し訳ありません。

長くなりすぎたので、サーヴァントたちの方は次話にします。
許して下さい

幕明 「動きし者たち―密会―」

SIDE ???

ここは、聖杯戦争の開催される冬木とは全く縁もゆかりもないアメリカの某所。そこにとある大富豪の屋敷がある。普段この屋敷に立ち入る者はなく、屋敷の主が出ていく姿しか見たことがない。その主は黒人で背はそれほど高いわけではなく、その体には余計な脂がなくがっしりとしている。それだけだと、見慣れている存在でしかないが彼の眼に特徴があった。その目は現在よりはるか先の未来を見ているようであった。そして、片方の目は金色で輝いていた。彼を狙おうとする者は多くいたが、その者たちが帰ってくることはなかった。その中には、二十七祖に匹敵する死徒もいた。彼は、このアメリカの裏を牛耳っている者で且つ未来を見続けるために転生を繰り返し続ける剣と魂の物語の関係者の一人であった。そして、魔術師としても一流で実際魔法使いといっても差支えがないのであった。その彼は屋敷の地下にある修練場で愛用のデスサイズを振るっていた。

フム……あの男がやつとサーヴァントとして召喚されたか……長かった。我々が聖杯を得るのは造作もないことではないのだが、それでは間違いなく世界が目的の邪魔をして最悪聖杯を二度と使わなくさせるという事態を引き起こすのを恐れて、今まで情報収集しか行えなかった。だがそれはようやく終わる。如何に他のマスターが神話の最高峰の英霊を呼びだそうが、あの男には勝てん！ 所詮英霊として登録されている者では、我等の様に世界から恐れられ抑止の守護者を返り討ちに続けた業には勝ることがないであろう！ さて、御剣^{あの者}のことだ……この聖杯がおかしい

ことにすぐ気がつくはずだ。情報を得るためにこちらに来るであろう、そろそろ準備をしておらねばな。あと、あの方にもこちらに来ていただけなければな……フッフ英雄王だと……笑わせてくれる……！　所詮、貴様は世界より遣わされた存在に過ぎぬ……！

我が一族が守護した閣下を倒すために生み出された物なのに、勝つことができずその足元に屈し、ましてや閣下の息子にも勝てなかった物がふんぞり返りおって……！　しかも、一地方の太守に過ぎない癖に鍛錬を怠り、圧政を強いて得た財貨を基にあらゆるものを買い込んだだけではないか……！　アレを手に入れようとしていたらしいが、貴様のような傲慢なだけの魂が扱えるわけがなかるう……！　身の程を知るがいい、アイツとの鬪いのなかでな……！　そして喰われるがいい、全てをあの■ ■ ■ ■ ■にな……！　貴様が求めたアレに喰われるのがさぞ気持ちいいであろう……ハッハハハ……！　さて、顧問を務めている会社に連絡して置かなければな、三週間程度、旅行に行つて来るということを。

S I D E ????

ここは聖杯戦争が行われる冬木に程近い滋賀県某所。その場所は時が過ぎても変わらず竹林が覆い茂っていた。古くからこの辺りに住む者たちは口をそろえて同じことを言う、『竹林の奥に進むことはならん……！　あそこには鬼がいる、喰われてしまうぞ』と。そのことを信じようとしない若者たちは奥に進んでいったが、戻ってきたものは誰もが発狂寸前の有り様という結果を叩きだしていた。まだ、話せられる者は言う、『化けもんが、化けもんが襲いかかってきた……！』と。そのため、興味本位の者が近づくことが大幅に無くなったが、この地に足を運ぶ者はいた。だが、その者たちは大抵誰一人も帰ってくることはなかった。……竹林の奥を進んでいくと、とある社が建っている。そこから、流れ出ているのは大量の妖気と邪気で、一般人がここまで踏み込めばどのような目に遭うのか

は一目瞭然であつた。普段はこの地に誰もいないはずであるのだが、何者かがいる気配があつた。石畳の上には一目で忍者だという格好の女性が今、忍び刀を納刀していた真最中であつた。彼女の近くには何人もの人が石畳に倒れていた、石畳を自らの血で濡らしていた。やれやれ、現代の混血の退魔の連中はこの程度か……。祠から溢れ出る氣に当てられて先祖返りしおつて、我を失うとはな！！情けない！ その程度の実力で来るでないわ！ 一々『鬼』となつた貴様らを討ち取るのは骨が折れるだけで実戦の腕が上がるものではないからな！

やつとあの阿呆侍が呼ばれたか・。我らのうち誰かがサーヴァン
 トとやらになってあの戦争に勝ち抜く、という運に任せるといふ場
 当たりのでありすぎたが、上手くいくとは……呼ばれたのだ、世界
 としてはできることが限られておる。無茶苦茶なことをすれば、こ
 の世界が崩壊するのがわかつているかな！　散々フザケタ真似を
 したのだ・。・。人が干渉するために設置した聖杯が勝手に壊れる
 という事態は作れまい。覚悟を決めるがよい、我らを嫌うのは結構
 だが、やりすぎたことがあるう。それを悔いるがよい！！　さて、
 この地に大がかりな結界を張り直してから参るとするか・。・。開
 催地へのう！！　私が一番早く着くのう、御剣を除けばな！　見て
 回って、結界の設置の下拵えをしなければな・。・。我らが動き回
 っていることに気付き冬木へと来るであろう星の意思である真祖の
 姫君とやら、二十七祖の連中を歓迎するためのものをな
 フフフフフ・。・。・。・。・。

・ ・ ・ ・ ・ 時は戦国時代、ある世を忍ぶ集団が半壊した。その一門は封魔という。退魔師の一つの集団であるが、混血や魔を狩ることに特化した退魔とは違い、俗に塗れた人々が見えなくなつた存在である魂などの霊的存在を狩っていた。特に現世に留まり続けたことによって悪霊がさらに進化し妖怪となつた物を中心であつた。彼女は那一門で自分の得物である忍び刀の更なる強化を目的に ■

■ ■ ■ ■ ■ を求め、その破片を手に入れて愛刀に打ち込ん

だまではよかった。ただし、その刀から発する邪氣や魔氣に師であり頭領が引き込まれるとは思ひもしなかったのだ。自分の愛刀を渡すわけにはいかず、頭領の変心に気付いた一派と共に頭領についた者たちを肅清したが、大勢の一門が亡くなった。物語の件を片づけた後、後輩を育てていったが、弱体化した一門を退魔師の連合に襲われ壊滅されてしまった。それに対する報復は実行したが、復興するだけの力は残っていなかったため、封魔は時代に吞まれてしまった。

SIDE
???

富士山麓。ここはある都市伝説で話題にされていた、曰く「富士の山は弱者救済を合言葉に世界を股にかけた義賊集団の本拠地である」と。
ここに残された財宝がある』と。古くから富士の山に生きているものはその話を否と答える。「彼らが蓄えることはなく、全て弱者に恵んでいる」と。そこに大勢の者たちが集まっていた。そして、その中心に異様な形相の鎧武者が座っていた。彼こそが弱者救済を旗印に義賊集団卍党を結成した党首でありそして、彼の意思に賛同した者たちであつた。彼はそもそも、卍と呼ばれた忍びの一族であったが、一族が当時の権力者に皆殺しに合い、復讐のために

■ ■ ■ を求めたが考えを改めた。逆に ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ の影響を受けた物を滅することにしたのだ。

「諸君！ 分かつているだろうが、つい先程あの男が聖杯戦争に招待された。此れにて、あの作戦が実行できる。長かった……あの者を解放するのに……世界の悪行許すまじ！！！！ 我ら卍党と共に動くものは限られておるが、成し遂げねばなるまい！！ 我らが戦争中やるべきことは分かっているな？ この戦争の毒牙にかかる者を、全く知らない関わりのない者を少なくすることだ！ 十年前は大火災が起き何百もの無関係者が亡くなった、原因は聖杯戦争にあり！！ あの災害から逃れさせるためには、かなり大

がかりのことをやらねばなるまい！！ 参るぞ、戦争勃発の地……
冬木へと！！」

頭領の言葉に無言で彼らは動き出す。無関係な者を守るために・
・

SIDE ???たち

中国奥地。十六世紀にいつの間にか廃寺となったのがある。その名を真行山臨勝寺という。その廃寺となったところに何者かの気配があった。そこには、青い胴着を着た青年が棍を振るっていた。鍛錬を行っているが、何者かを来たのを察して振るうのはやめていた……ただしその顔は来てしまったのかと苦虫を噛んでいた。彼が目を向けた先には、中華刀を持ち青い服を着た可憐な少女が彼へと近づいてきた。

「君もすぐに来る必要はないのに……どうしてなんだ？ 巻き込ませたくないのに」

彼の問いに、何の迷いもなく彼女は答えた。

「何言つてんの！ 貴方とずっと一緒にいることが私の幸せって言ったじゃない。一人で先に行こうとしないですよ」

「ごめん……大事なことを忘れていたよ。君も気付いているけど、あの人が呼ばれた。これでようやくできなかったことができる。本来ならあんなのに頼ってはならないんだけどね」

「仕方ないわよ……私たちが穴を開けても、世界が違う穴に作り変えるからどうにもならなかったんだから。それに、この件が片付かない限り隠遁の生活を送ろうにも送れないわよ。問題が解決されていないんだから」

「そうだね……けど戦争中に別の問題をあの人が起こしてしまいそうなんだけどね」

彼は苦笑していた。聞いていた彼女の方も納得していた様で、げんなりしていた。

「あの人は私たちの中で上位にいるけど、戦か死合いにしか興味ないのが傷なのよね。傭兵故に頼まれたのなら仕事は行うけど、頼まれないのなら一切手を出さない、それがきっかりしているから余計拗らせてしまうのはあり得そう・・・ハア・・・龍（ロン）さんが言っていたけど、興味無いものにはとことん冷淡なところがあるから一波乱起こるのは間違いなさそうね。だからこそ、私は付いて行くわよ、意地でもね。何も聞きたくないわよ！」

と笑顔で言い切った。その言葉を聞き、青年は仕方ないなあという顔をしていた。

「分かった。共に行こう、冬木へ！！ 僕たちがやることは、その地の浄化及び結界の強化。忍びの人が行うのは、悪霊や妖怪といった類が来させないための主だから、どこまで持つかは分からないんだって。あの転生者も動くだろうけど、癖が読まれているらしいからそんなに持たないって言ってたしね。責任重大だよ、でも君と一緒にいたら何とかなるさ」

そんな会話をしながらも彼らは向かっていく・・・魔術師たちが開催した戦乱の地へと

SIDE ???

東南アジアの某所。時代の渦に吞まれて消えて無くなった一部族がある。風奉りの一族と通称呼ばれていた。その名の通り、この一族は風を信仰していたのだ。彼らが住んでいた地に入る人者は誰もおらず、その地は自然が手つかずのままであつた。その地に何らかの動きがあつた。彼らが、信仰する風に対する祭壇上である小さな少女が両手にトンファーの一種を持ちながら、剣舞のように舞っていた。彼女は、風を奉る最後の巫女であり、関係者の一人である。

あの方が呼ばれた・・・そのことに対し世界は震えている。それは風を通してよく分かる。けれど、世界の震えをどうにかするつもりはありません。元々、この件に関しては世界の方があるべき姿

にしなかったことにあります。それを私たちが解決するだけです！
……でもそれとは別に、この聖杯戦争という戦争自体に風が悲鳴をあげている。十年前も同じ反応を感じたけど、今回はそれ以上……一体何が起きているのでしょうか？ 思えば、これより更に六十年程前のある日から始まった。本来、呼ばれた人の支援として戦争中に行く必要はありませんが、この異常を知るために見に行かないと……そして、可能ならば被わないと、ところで誰が支援に行くのでしたっけ……予定では？

SIDE 姉妹たち

ギリシア、エウリュディケ神殿において この神殿はオリュンポス十二神の一人、鍛冶神ヘパイストスが自ら設計し建築された大宮殿とされている。文明発祥の地の一つであるこの地ではオリュンポスの神々が信仰されていたが、国家的変換の中で彼ら古代の神々への信仰が失われていったが、神話の世界として心の奥底には息づいていた。普段はこの神殿は、信仰を失われて輝くことは無くなったが、十六世紀に一度だけ復活しその浮遊するクリスタルの床が輝いていたと噂されている。今、またその地が輝きを取り戻していた。そこには、左に剣を右に盾を持った二人の女性が舞うかのように互いに得物をぶつけ合っていた。一人は古代の人々が着ていそうな白いローブの様なものを着ていて、もう一人は当時着ているような青い服を着ていた。青い服を着たほうが口を先に開いた、武器である剣を振りかぶりながら

「姉さん、やっとあの侍が呼ばれたみたいね。これからが忙しくなるわね、だから私が行っていいでしょう？ 正直あの人たちだけだと不安だから」

剣を盾で防ぎながら、もう一人の方がそのお願いを拒否していた。どうやら、この二人は姉妹のようだ

「ダメよ……貴方だつて気付いているでしょう？あの戦争に今

回参加する方々の何人かについては……自分たちに関連する英霊が出た場合は最終段階になるまでは動かない……。特に私たちの場合それは守らなくてはならないのよ！これ以上勝手な行動をして、あの方々の立場を悪くしたら危ないことぐらい分かっているでしょう！！行かすわけにはいかないわ！！」

「だから、姉さん……。その対応が間違っていると思うんだけど……。大体、アレを壊すことを頼んでしかも一応は成し遂げただからアレぐらいのことをして当然よ！！何、遠慮しちゃっているのよ！！自分たち神々やその血を引く者では触れることができない代物だから、神託という形式取っていただけじゃないの！そして、神託が聞ける姉さんに白羽の矢を向け難題押し付けただけじゃないのよ、結局は……！」

その言葉を聞き、姉のほうが激昂した。

「つつつ！！！！貴方ね……。ゾンザイに扱いすぎよ！実際そうなのは分かっているけど、だからといって貴方を行かす理由にはならないわ。今ここで大人しくしてもらわよ、覚悟しなさい！！」

その言葉に反応し妹は跳んで後退し、大技の準備をしていた。彼女から発する聖気の量が一段と増えていた。それは姉の方も同様であり、一触即発の態であったがそこに

「止めよつつつ！！！！ここは姉妹が争う場ではない！！双方武器を納めるがよい」

彼女たちの間に壮年の男性が立っていた。彼は非常に醜い顔をしていた。彼こそがこの神殿の主、鍛冶神ヘパイストスその人であった。彼を見て、両者はそれぞれ驚きの言葉を出していた。

「ヘパイストス！」

「アンタ、何しにここに来たのよ！！」

彼女たちの言葉を無視するかのように話し続けた。

「そなたたちの会話の内容は聞いていたぞ。じっとしておるのが嫌なのだろう？カサンドラ……。行くがよい、止めたりはせぬ、ま

たお主の家族は大丈夫だ。それはこの我が保障する……だから安心して妹を送るがよい、ソフィーティアよ」

彼の言葉に啞然としたのか、それぞれ武器をガシャンと音を鳴らして落としてしまった。

しばらくすると内容を理解したのか、妹「カサンドラ」から声が上がった。

「本当にいいの……行っちゃって？ 何かあったの？ 何の代償もなく、そんなこと保障しちゃって大丈夫なの？」

その言葉に姉であるソフィーティアが同調する。

「カサンドラの言う通りです。一体どうしたのでしょうか？ オリュンポスの残りの神々が、加護をして下さったアテネを除き、私たちがやるうとしていることに賛同しているとは思いませんが？」

彼女たちの疑問に応えるべくゆっくりと口を開いた。

「最初はそうだったのだが……あの件が未だに続けていることにはさすがに憐れみを通り越して、何とかせねばならん！ ということに纏まってな、そのためになら仕方ないと思っておるぞ。何せ、世界の方に解放していいのではないかという嘆願が他の神話の主神からもあったのに無視しておるようだ。我々はこここまで来たら、決着を付けるべきだと意見になつておる。お主たちの計画に干渉するつもりはないぞ……ただし、必ずやつてもらいたいことがある。今を生きる魔術師たちが世界に干渉するために作った聖杯をそなたたちの件が済み次第、何としても速やかに二度と使わすことができないよう破壊するのだ！！ 今の聖杯ではア奴ら魔術師が求めたことには辿り着くことなどどう足掻いても不可能なのだ！！ むしろ、あるだけで災いを招く物ではないのだ！！！！」

鍛冶神の切実な言葉に彼女たちは同時に尋ねた

「一体聖杯に何があったのですか（よ）！！？」

彼女たちは聞く、聖杯の真実を……そして、カサンドラは急ぎ向かう。伝えなければ……取り返しのつかないことになる前に。

SIDE 密会する者たち

「何いつつ!!! この世全ての悪に汚染されているだとお!!!」
「・・・でそれは不味いのか？俺たちが持っているアレよりえらく雑
っパなもんなのに？」

この言葉を発したのは御剣であつた。今彼がいるのは時の彼方を
望む者と言われているザサラメールの屋敷で、食事をしながら氣に
なつたことを話していたのであつた。彼は公園内の怨霊を刀に吸収
したあと、すぐに彼の屋敷に向かつたのだ。

「我々の計画には別段支障があるものではないがな……大体悪とい
う一くくりで我らを呑み込めるわけが無からう!!! ただし、我ら
以外だと全員吞まれるのは間違いない代物だ……この場合犠牲
者を出させないためには、さつさと終了させることが望ましいのだ
が「それは、断るぜ!!!」どうしてなのか理由を説明してもらうぞ。
・さもなければ、他の連中の説得はするつもりはないぞ私は」

ザサラメールは内容次第でいつでも、魔術を行える態勢になつて
いた。彼はその氣になれば大魔術をシングルアクション一工程で軽々と放てるのだ。武
器を使つての戦闘では上位である御剣の最大の欠点是对魔力の低さ
である。元々、魔術とは最も縁もゆかりもないのだから当然なのだ
が・・・ただし、洗脳とかの類は効かないのだが。だからこそ、生前
魔術を多用する輩にはうんざりしていたのだ。彼に答える前に御剣
は酒を杯に注ぐとそれを一気に飲み干した。

「早くしたところで不味いことが確実に起こるぜ……片一方とはま
だ話してねえけどな。これを聞いただけでも、俺の気持ちが分かる
ぜ。じゃあ「遅くなつてすまなかつたな」……………おいおい、
何でこのオッサンが来るんだあ？ もう来るのか？ 早すぎるだろ。
……………いくらなんでも」

彼（御剣）は話そうとした瞬間、来客した者を見て絶句していた。
彼が見た先には白い髪でその髪を何本も編んでいて、左目には大き
な裂傷が走っていて、今まで見たことない鎧を着こなしている大男

が立っていた。それだけでも十分異様なのだが、彼から発するのは闘気や剣気の他に覇気でみなぎっていた。これだけの覇気を発するのは今までの過去の英霊にあったのかと言えるほどであった。その疑問にザサラメールは答えた。

「いや、閣下はここに待機していただくつもりだ。さすがに今来られると計画が失敗するのがわかっていているからな。呼んだのは、貴様が気になっているであろうもう一つのことに対して教えてもらうためだ。何故なら、ずっと現界している前アーチャー、ギルガメッシュのことをよく知っていらっしやるからな」

その言葉に御剣は反応を示した。

「ほお・・・あの金ぴか野郎はギルガメッシュって言うのか……ソイツと一体どんな繋がりがあるんでい？ 歴史に残らず初めて天下を制した始祖王・・・アルゴルさんよ！！」

アルゴル・・・その者こそ、本来初めて世界を制した男の名である。彼が初めて幾多の犠牲と執念、更に年月をかけ鍛えられた上、戦乱で斬られた人間の憎悪を吸い尽くすことに喜びを感じる剣となつてしまった邪剣■ ■ ■ ■ ■ に操られず、その力を以て乱世に終止符を打ったのだ。アルゴルは重々しくそれに答えた。

「あの物は、我が天下を制する直前にいきなり現れて、我が前に立ち塞がった。おそらく、世界に遣わされたのであろう……このアルゴルを討てとな。だつたのだろうか、当の本人は遣わされたことに腹を立てているらしくさつさと済まそうと思っていたようだ、何のことはなく圧勝だ・・・無論この我がな！！あの物は何の技量もない、ただ己が絶対であることに何の疑問もなく勝っていることを前提にしておつてな、非常に気に喰わないその姿勢を一撃で叩き潰してやったわ！！ やった攻撃というのは、単に武器という武器を並べて放つということしかやっておらん！ 近づけば、お主の勝ちでしかない。ただ、勝つてもつまらぬ存在だ、断じて強敵とは言えん！ それだけは断言できる！」

その言葉を聞いて、面倒な顔になっていた。

「はあ・・・相当つまんねえな、だとしたらよお！！　そういう奴から片づけたほうが早いな。そうそう、本来言おうとしていたことを忘れたぜ。オッサンも聞いてていいぞ、呆れるからな確実に」
彼が話した内容に聞いていた二人は呆れを通り越していた。

「なあ、お前を呼んだマスターの父親は馬鹿か？　養子に送るのなら、逆だろうに・・・何一つ教えもしていない者をなどは正気でやったとは思えんぞ！！　術者としてなら、その対応は間違っただけなくもないが、親としては名乗る資格すらないぞ」

とザサラメールの弁であるが、アルゴルの方は怒髪天をついていた。

「何たることを！！　その者を見つけ次第八つ裂きにしてやりたいところだが・・・いないのか？」

「それがよお・・・現世にはいないんだわ。何の間違いもないと思っているんだろうよ！　その姿勢で裏切られたんだだろうが・・・俺の勘なんだが、人間として欠けているわ……大事なモンをな！！　！　例えいたところで話になんねえし、余計悪化させるだけだろうからな。本来なら無視していいんだが、一人の漢の真摯なあれを見ちゃあさすがに可哀想だからな・・・要らぬ老婆心を出したいんだ俺としては。ただし、今までの負の遺産を出すんだ・・・安易で楽な道は進ませねえ。徹底的に追い詰めさせるつもりで行く、人として、姉として一族の全てを壊すほどまでにな。そうまでしねえと駄目な線行っちゃまっているからな。荒療治で行くしかねえんだよ！！

・・・で、オメエらは長引かせることには賛成か？」

その決断は非常に重いものであった。彼ならその気になれば、三日ほどあれば全て決着をつけれるのだが、それをあえて延ばそうとしているのだ。延びれば、犠牲が増えるのは間違いないのである。無論、彼らは犠牲者が一切出ないということを狙っているわけではない。戦乱に犠牲はつきものののだ、ただ今回自分たちが生殺与奪の権を手中に収めているので、決定しないといけなただけなのだ。

まして、彼らの目的は当事者以外からするととんでもないのだから、これに巻き込まれる無関係者をどうにかしたいと考えていることに過ぎないのだ。

「いいだろう、支援として来る者や気になって来る者は本人を見てもらうしかあるまい。だが、遅滞目的の方は私が話を着けておく。それでいいな？」

とザサラメールは御剣の提案にのった。

「だが、見込みが無くなった場合はもちろん「ああ、全員始末だ！　贖罪とかいって、逃げたガキどもは一人も逃がさねえ！！」全員纏めて、仲良く逝ってもらおうじゃあねえか！　それが、関係者つてもんだらう？」なら、良からう。呼ばれたのは貴様だ。独自決定権は貴様の中だ」

アルゴルの方は無言ながらも、肯定のうなずきをしていた。

「じゃあ、そろそろ帰るか。オメエも早く来やがれ！　方針決まっているんだが、細かいことは全然でな、意見を出してほしいんでな。あの女以外にな！」

こう言って、彼は席を立つのと同時にすぐに消えた。彼が行ってから暫らくすると、

「・・・・・・珍しいな、あの男が老婆心を出すとはな。助かったな、早く決着が着いても、その姉妹の死だけは確定済みだったのがな。その者に感謝するのだな、気付かないだろうが。我らの中でこういったものには最も知ったことではないと考える者を動かしたのだからな！！」

「・・・・・・さて、私も参るとするか。閣下は今暫らくお待ちください」

そう言って、ザサラメールはデスサイズを手を持ち、何も無いところへ振るい穴を発生させるとその穴へと入って行った。

「誠にその通りだ。あ奴をそこまで振るわせたのだ！！　自らでどうにか喜劇に終わらせて見せる機会を与えられたのだ、どうにかして見せよ！　今を生きる者たちよ・・・・人の業は人で超えられる

のだ。世界に頼ろうとするではない！」

とアルゴルは誰もいない空間でそう呟いていた。

――御剣の動きに呼応する剣と魂の物語の者たち――

――彼らは何を解放するのか　謎は深き物――

――それとは別問題の浮上――

――彼らが下したのは人を信じたがゆえの非情　イバラの道――

――与えられた期間は短い――

――関係者たちは成し遂げれるのであろうか――

幕明 「動きし者たち―密会―」 (後書き)

今回出てきたキャラのステータスはいずれ出すつもりです。待っていてください

幕明 「気付きし者たち―警戒―」（前書き）

退魔の話があるのでマスターが変化しています。余計に不味くなり
そんな展開ですが、そこらは御了承下さい

幕明 「気付きし者たち―警戒―」

SIDE 夢を失いし魂の残骸

・・・・久しぶりに夢を見おった。魂の劣化が著しい今の現状であるのに、夢を見るのは誠に珍しい。そして、見た内容も異様というより驚愕に値するものであったから尚更じゃ！ それは若かりし頃まだ我が一族が極東のこの地に根を下ろす前、欧州を舞台にしておった頃でしかも十六世紀から十七世紀、あの激動の時代であった。この儂が表で動き回っていた頃の話じゃ、過去を懐かしむことなどとうに捨てていたつもりだったが、あの頃だけは忘れられん！ ！ 他の魔術師にしてみれば暗黒時代でしかないが、この儂にしてみれば最も価値のある時代であったと言える物じゃ・・・魂が劣化しておってもこれだけは覚えておったことに心から喜びを感じる。ヨーロッパのとある森

儂が標的として狙いを定めた者が、ここで野宿をしているという情報を使い魔の蟲から手に入れ、あの侍を討つことを目的に集まった魔術師たちにそれを持ち込んだところから始まった。本来魔術師というのは一族単位でしか群れることはない、当たり前じゃ、群れるということは己が一族の神秘に至る秘儀を他人に曝すということに他ならん。じゃが、あの時に限ってその基本を一つ守っていられる余裕は無かった。何せ、戦乱の時代にしか出てこないあの剣がこの時に再びその姿を見せたのじゃからな。アレは星によって、神によって作られ鍛えられた武器とは違い、人が超越的存在に頼らずに作られた物・・・それも戦乱の度に成長するというどうみたって唯の剣では済まされん物になっていた。そのあり様に世界が破壊を企てた代物であるのだが、その干渉など屁とも思っていない、それをどうにかできるのはその剣と対になるもの以外では無理となっていた。世界が手を出せなくなっているというその事実には魔術師

は目を付けていた。それを使っても世界が出せる手段など意味のないものと成り果て、求めた物「」に触れるのではないかという考えが蔓延していた。星の意思の表れである真祖や死徒では触れることができないのだ、かの宝石翁でも然りじゃ。もし触れようとするなら星からのバックアップを断ち切らん限り未来永劫不可能で、切ったところで脆弱に成り果て、できないという結果しか待っていないのだからな。あ奴らはその問題にかぎって知らぬふりをするしかできることはなかった。あの時だけは滑稽だったのう・・・カッカッカッカッ！！

それを求めて、多くの名門が消えていった。おそらく剣に振り返り討ちになってしまったのだろう。その事態に頭を悩ませた協会は、剣を獲得するときだけ共同で行うよとの通達を送っていた。これ以上減らされても堪らんが、「」に至れることは間違いないというその興味を無くすことができなかったからこそその決断であるのだが、そう簡単にはいかず一族単位で挑むその姿勢が変わらず益々減らす事態を起こしていった。古豪はそれに元から手を出さないという逃げの手を打つところまで追い詰められていた。それに関しては聖堂教会も然りで、神秘としては認められる物ではないから動いてはいないが、どうにもならなかったことは今に至っても手に入らなかった点からも窮状ぶりがわかる。じゃが、あの時代は別であった。

魔術師とはゆかりもない者までアレを求めだし、現に手に入れてしまっておった。あの時の衝撃は言い表せん程であった。しかも、理由はまいまいち分からんがアレに内包しておった邪気が全世界に溢れだしたようで邪気による怪光現象が起きて精神を狂わせる事態が頻発し、一般人だけでなく儂ら魔術師や死徒といった類まで被害が及び、そっちの対策に時間がかかり動くのが遅れてしまった。そのため、完全にあ奴らがあの剣の保持者となる時間を与え、それを奪い取るという工程をしなければならなかったのだ。逆にコントロールすることをしてなくて済むようになったのだが、あの剣を超える・・・・・・ということは世界を超えている存在を相手にせねばならんのと

同義であり、より面倒なことになってしまい求めて消えていった数は今まで求めて消えていった者と同数になるほどで手に負えなくなっていた。それは二十七祖や聖堂教会も同様で、死徒たちはこの時代に永久欠番となった位階もあり、教会は埋葬機関まで動員した拳句そのメンバーが全員帰って来なかったという三大勢力が完全にこの時代著しく弱体化したのだ・・・たかだか三十人程度のために

しかも時計塔の足元の女錬金術師がアレの関係者と当初気付かず、情報が漏れていたことはまさに屈辱級の汚点といえよう。慌てて彼女の捕縛に向かったが、逃げられてしまいついでに当時のバルトメロイ家当主を失うという失態を犯し活力を失った。その中でも、儂は諦めず奴らを追い一人を狙い定めていた。何故そ奴を選んだかというと、魔術を使えんという事実があり、さらに戦を求めにちよくちよく日本や大陸を行き来していたことで、見つけやすいということが挙がる。儂一人では勝てるとは到底思っておらんので、連中と手を結び最後に裏切ろうと考えていた。連中は「」を求めているが、この儂は別だったからな

・・・・・・はて、この儂は一体何のためにアレを求めたんじゃない？ 不老不死？ いや、そうではあるまい、まったく別だったはずじゃ！！！！

劣化して肝心な物を忘れてしまうとは……そういえばこの儂は聖杯に何を望んでいたのじゃ？ 今更考え出すと、そのことすら分からん現状に絶句してしまふ。何だったのだ、我が望みは……！！

このことを今更ながら思い出すという行為は、ひとまず置いておこう。夢から覚ますと、儂の手に令呪が現れておった。オカシイ・・・確かに始まりの御三家である儂らが優先的に持たされるようになってはいるのだが、それは胎盤孫娘が持つことでルール上の責務は果たされておる。何故じゃ、一体何が起きておる？！ 三回目の結果からシステムは崩壊しておるが、ここまでとは……………！ 今度も静観しようとは思ってはいたが、そうは言ってられぬ！

これ以上悪化しては僕の手の内からも外れることが大いに有り得る。これを好機と捉えたほうがよいのかもしれない、さらに監視役が欲しいと思っていたしのう。孫娘が参加したくないという展開は読めていたが、サーヴァントの支配権を孫に譲っているが**孫**の動きがさっぱり読めん！力に溺れ、阿呆なこともするやもしれんし何を仕出かすかが分からん！

感情の爆発の方向が一定しておらぬことが最大の原因じゃ。どこを間違えたのやら、父親から想像つかん者が生まれるとは、誠に不安定材料過ぎるわ！

さて、呼ぶとしよう**孫の監視役**サーヴァントをのう

—— 翁は思い出す 宿願を 本来の目的を

—— 届かぬことに絶句し、行いし所業に震える時が近い

SIDE 摩耗し続けた魂の残骸

……ようやくだ、聖杯戦争が始まるのであろう。それは、この私を引きつけている存在からわかる。これで、私の目的が達成できる機会を手に入れたのだ。私を呼ぶのはおそらく、彼女だろう。上手く立ち回らなければな。そう思いながら、ふと気になったことがあった。

オカシイ……彼女だったら、何らかのうつかりをして碌な目に合わないと思っていたのだが、上手くいき過ぎている。もしかして、彼女ではない？

疑問が頭によぎっているなか、この世界に降り立ってみるとそこは腐臭と水気の臭いが立ちこむ蟲蔵であった。ここは、自分が知っている限りだと家族と思っていた少女の地獄を生み出した地であった。そして、私の目の前には元凶を招いた妖怪がいた。張本人

「ふむ、やっと来おったか……お主のクラスは何じゃ？」

現状の確認はひとまず置いて、この者に答えることにしよう。
「サーヴァントアーチャー、召喚に応じて参上した。これより、我が弓は貴君に勝利を捧げよう。マスター貴方の名は？」

これを聞いて、あの爺はこれはしまったという顔をしていた。

「これはまずかったのう、我が名は間桐臓硯。アーチャーよ、お主はこの聖杯に何を望む？ 望みし物が無ければ、我が命に従うだけでよい」

今臓硯を殺してやりたいところであるが、どう動くかが読めない時点ではできない。下手をしたら、彼女桜を乗っ取るという類を平気でしかねない怪物であることは十分に考慮して置かなければな、今は臓硯コイツに従っておくことにするか。

「私はこの聖杯に望むものはない。して、マスターは私に何をしたいのだ？」

SIDE 蟲翁

アーチャー

こ奴は望むものはないと言っておったが、ええい、怪しすぎるわ

サーヴァント

！！！！ 英霊にだって望むことがあるから、招きに応じているはず・

・・・何を考えておるのじゃ？ 儂にまで令呪が現れるとは思って
いなかったから、当然触媒などは用意しておらんから己の魔力だけで呼んだのじゃから儂と似た思考を持つものが出てくると踏んδειたが、全くそうとは思えん者が来るとはな！ ここまで聖杯が狂っているとは・・・尚更、この戦争で手に入れんと不味い。とは言え、招きに応じたのがアーチャーであるのは幸運じゃや。こ奴ならアサシンほどでは無くとも、十分に索敵及び監視に打ってつけじゃ…… 全面の信頼はできなくとも、使えることは使える。警戒だけはしておくことにするかのう……

「してもらいたいのは我が孫娘の護衛と及び孫の監視じゃ、今のところはのう。それ以外は追って沙汰する」

……………ちよつと待て、儂は不安材料を無くすために呼んだは

ず……逆に増えておらんか？

SIDE 弓兵

私が呼ばれた場所から既に異常ではあったが、マスター臓硯に護衛と監視の二人の写真を見て、この世界はそれほど変わっていないことにほっとした。だが、アイツを監視しろと言われるとは想定外な事柄ではあったがな。一体何をしたんだ、妖怪臓硯が監視をしなければならな

いほどになっているとは……ここのアイツは！？

「ふむ……マスターよ。一つ聞いていいか？ 貴様の孫は写真で見た限り、プライドが高いだけにしか見えんが、何故私を使ってまで監視させるのだ？ 仮のマスターであることに増長し、暴走することのみならそこまでする必要は無いと見るが？」

その言葉に反応し、苦虫を噛み潰した顔をしていた。

「それだけなら儂だつて苦労せんわい！！ むしろ、放つとして自滅する時に孫娘に令呪を使わせて、ライダーだけを逃がさせるだけで事足りるわ！ その面はあるにはあるが、偶に全く別の顔をしておつてう。その時に見せる容貌かおは哀れと呆れ、道半ばなのに急に萎むといった逆な面で、何に對してだか読めんのじゃ。蟲でそれを探ろうとしおつても、そもそも回路が無いあ奴に蟲が寄り付かんのではとほと困つておる。孫娘を使って探ろうとしたが、その時のあ奴は怒りと憎しみといった面しか見せん！ じゃから、お主に監視をしてもらいたいのだ、否とは言わさん！ これは決定事項だ、こんな下らんことで令呪を使わせるでない！ あの神父ほどでなくとも、令呪は数個あることを忘れるでないぞ」

こんなことを妖怪から言わせるのだ、色眼鏡をかけることはやめておこつ。もしかしたら、私の最大の邪魔になることはないが、鍵を握つていそうだからな！

……ところで、彼女は、凜は一体誰を呼んだのだ？ そこが無性に気になる

—— 自分の存在の抹消を望みし者は気付かない

—— 今自分が家族の一員と認めた少女を救える機会であったことを

—— 己の目的に執着した時点で彼は降りてしまったのだ

—— 自分が掲げた理想を行える目の前のことを

SIDE 壊れし生きる死体

このところ、お爺様の気分の変転が激しい。私を虐める時とは違う喜びの顔を見せた途端、一転して固まり、悩んでいる姿をよく見る。まるで、過去を回想しているようにしか見えない。私には思い出しているいい過去なんてありはしない。あるのは苦痛でしかない。それを見るたびに私の中にある悪意と反応してしまう、憎い、私に地獄を与え続けている者が過去を振り返っていることに。それだけでは済まさず、大抵私以外の全ての人にまで対象を広げてしまう・・・。それには当然あの人も含まれている。そこまで至って、ようやくその思考から抜け出せる。でも、この回数は益々増えていくばかり・・・。まだ、戦争で座に還った者はいないのに。このままだと、自分でいられる時はそう残っていないかも・・・。もし、そうなった場合はどうしよう？ 吞まれた後、私は一体何をするか分からない現在対処の仕方もない。いや、考えたくないといった方が正しいのかも知れない。元々考えることを捨てた身・・・。今更考えなんて思いつくはずがない。

戦争から降りると言った時も、私の意思なんてあったかどうかすら怪しいくらいだ。大事な物である私をこんな戦争で失わせたくなーいとお爺様は考えているはず、もし参加すると言った時は心臓にあ

る蟲を使つて翻意させるに違いなかった。だから、兄に支配權を譲つた時、何の感情を持たなかったのだ。兄は貰つて喜んでいた顔を見せていたが、どこまで本音が出ているか分からない。もしかしたら逆であることが十分に有り得る。あの地獄を見られてから、兄との関係は大きく変化した。私に本音を見せなくなったのだ。私を痛めつける時でも、憎悪と腹立たしさを見せていたがそれだけとは変わらなかった……見られていると勘づいているらしく。お爺様はそのことを危険視するほどであつて、何度か實力を伴つて吐かせようとしたけど、それでも吐かずにはいた。凄い精神力だと思う、私だつたらすぐにでも吐くのにな……。一体何がそこまでさせるのだろうか？

でも、兄は学校にいる間だけは気が最も抜けていると思う。何か気が張りついてないとすぐに気付くほど。特に部活動の時は顕著であつて、集中してやっている……。それも一心不乱で。でも、私が顔を見せるとそんな顔は見せない。むしろ、家で見せる顔に変化している。その変化ぶりに誰もが疑問になつて、問い詰めても韜晦している。あの人もめた時も自然な怒りが溜まつて爆発したように思える。そのことはあの人も分かっているらしく、だからこそ友人として接しているのだらう。それが羨ましく思える。知られる前までのことを思い出せるのだから。彼の優しさを懐かしめるのだから。

——自分から動くことを止め人形となつた者は知ることができない

——その者が何を思っているのかを

——分かつたうとしない態度に原因があることを

爺さんの機嫌はすこぶるいいようだ。まあ、あの女には分からないだろう……機嫌がいい理由を。ずっと分かるうとしていないんだから当然だけどね。そんな姿勢で関係が進めると思っているのか？ それとも、現状に満足しているのか……。どっちにしても取っている手が最悪でしかないと思っっているのは僕だけだろう。あの虎も分かっているんだから少しは手伝えと本気で恨みたくなる。自称保護者と言っているんだから、その手のことをしろよ！！ただ飯喰らっているだけじゃなくてさ！もしかして、本気で分かっているのか？ だとしたら、その自称を捨てろ！！！邪魔でしかないんだよ！

ハア……。本来はアイツが原因であることに違いないのだが、そういったことを求めてはならないことはよく理解しているから、何も言わない。逆に言って責任とかの方向に持つていつては非常に不味いからだ。そんなんだと、あの女は変わらない、いや変わろうとしない！！でも、今のままが続かれてもアイツの緩やかな死しかないことは確かだから、どうしようかと悩んでいる。本人たち（特にあの女）は気付いていないだろうが、今のままでは喰う喰われる関係へと移行するのが時間の問題だ。そうなったらアイツは何とも思わないだろうけど、あの女は今度こそ罪悪感にかられて何を仕出かすが見当つかない……。まあ、この戦争で何も起こらなければだけど。

爺さんの様子に対して、このところアレは何を思っているのか見当はつくがそのことに反応し黒い何かが周りを覆っている。すぐに元に落ち着くが、どんどん回数が多くなっている現在の、余計近づきたくない。何故なら、黒いアレは全てを呑み込みそうでの僕が引きずり込まれると理解できているからだろ。一体何をしたんだかは知らないけど碌な^{改造}ことをした結果であることは分かる。爺さんはコントロールできているのか？絶対無理だと確信している……。いくら人間やめた存在であっても黒いアレは別格だ・

・何か人を構成する根本的なモノが集まった類のように見えて仕方ない。この戦争中にアレが発端となつて何かを引き起こす可能性は捨てきれない。この問題は、戦争が起こる直前から起きているのだ・・・関係しないわけがない。それがまかり間違つて起きた場合、僕が真つ先に喰われそうなので、それも無造作に・・・逃げようにも逃げる時間を与えられないと思うので、こつちも絶対とは言えないが死しか待つていない。無造作にそれも、あの女によるものだと分かつていてそうはなりたくない！！死に方ぐらいはこの僕が決めてみせる！いいところに丁度あの女が召喚したライダーが丁度いい手段を保持していたので、使用した。これに気付くはずだ・・・あのプライドが高い女は。間違はなく許そうとしな
セカンドオーナーいだろう、冬木の管理者としてこの僕を討つとするだろう。それが狙いだ、聖杯戦争に参加して魂喰いを堂々で行わせた魔術師のなりそこないがセカンドオーナーに討たれるとして記録されるだろう、すぐに忘れされるだろうけど。少なくとも、あんなのよりかは遥かにマシだ！！何にも役立たなかったアイツができる仕事だろう。思えばプライド高いアイツに見切りをつけたのは早かった。偶々アイツとあの女が話し合っているのを見たとき、呆れてしまったのだ。僕よりもっとひどい壁が両方に建てられているようにしか見えなかったのだ。あの女がそれをするのは当然だろうと踏んでいたが、あつちまですることに対してであつた。確かに、不可侵の盟約を結んでいるがそれを姉妹間でも適用していることに駄目だ、どうにもなんないやと気付いてしまったのだ。だが・・・ご近所の話は聞いているかぎり、十分盟約違反になつていゝと思つていたからこそ期待したのだが、あの状況を見た瞬間吹っ飛んでしまった。その接し方があまりにも魔術師たろうとする姿勢であつたから・・・こんなんでは事態を知らせたところで本音を言わず、責任といつて誤魔化そうとするのが目に見えて分かつたから。よしんばそうでなくとも、向こうの方が心を開くことが無いから・・・それでは意味が無いんだよ！！頼れるのはアイツしかない・・・けど、アイ

ツは鈍すぎる！！ 進展を進めさせるためにはどうしたらいいのか、もう思いつかない。完全に手詰まり……だからこそ早期に終わらして事態が発生させないようにするか、諦めて死に方だけでも選択の自由を得るしかない。ただ、そう簡単にすぐに終戦というわけにはいかないだろう。爺さんは何を考えているか分からないし、監督役であるあの神父は人の皮を被った悪魔と言っているいい存在だ。他人の不幸を悦びとする最低野郎だ、だからこそ悲劇を起こさせるために介入する可能性がある。爺さんからは近づくと言われていたが、昔たった一度だけ立ち寄ったことがある。救いを求めていたのかも知れない、今となつては理由は不明だ。でも、忘れられない……。穏やかな顔をしているが、あの女とは全く別の虚無を感じたからだ。だから、悩みや懺悔すべき本当の内容を言えなかった。言つてしまつたら、挟られるとそう感じたから。帰つてきたら帰つてきたで爺さんから何をしていたかと蟲蔵に強制連行され、痛い目にあつたが、あの女にしてみたいなレベルまでいかないからどうにかやつていけるのだ。そうでなかったら、とつくのとうにあの世行きだったはず……。回路も何もない僕にしてみれば今のレベルでも厳しい。しかも、吐かせることを目的としているためあの女のように気絶させる責め苦ではなく、死ぬほどの痛みを与え続けるのだ。吐かない姿勢に対し何度か殺すつもりであつたようだが、その都度途中で終わりに現在に至っているのだ。そのためか、変に痛みを感じなくなっている今日このごろであつた。慣れというのは怖いなと本気で思っている、もしかしたらあの二人の関係もそれにあてはまるのか？ だとしたらヤバイ。それは人としてなくなっている証拠だから……。まあ、どっちともそういった意味では同じでお似合いなんだよな……決定的な一歩が足りないけど。

爺さんが他人を虐める以外のことでは喜ぶ事柄は、剣と魂の物語について聞かれた時が一番だと思う。あの時だけは裏表なく好々爺と喋っていいほど話してくれた。余程忘れられないことであるのがよくわかる。でも、何のために求めたのかといった類を聞くと一転す

る。凄く悩むけど、思い出せないのか『聞くでない!!』と一喝される。気になって、爺さんの書斎に行って当時の日記などを探し出して読もうとしたが、なにぶん古過ぎるせいか字が霞んでいて読めない。読める部分があっても、字が当時の文字なので読めなかったという結局分らないのだ。その時だけは、爺さんは怒らなかった。自分でも思い出そうとして思い出せず、語れないからこそなのだろうと一人で勝手にそう思い込んでいるが、実際は分からない。そう、誰もこの家は本音を言わず分からないのだ! 何を考え、企んでいるのか・正直これには疲れてきた。だからこそ分かる、雁夜おじさんが何で家を出たのが。嫌になるよな、普通は。でも、何で出戻って来たのが分からない、それも身をボロボロにしていく理由がさっぱりなのだ。本人は十年前から帰って来ないし、真相は藪の中。父さんは、何も語らず酒で身を崩しすぐあの世へ行ってしまった。さて、今更のことを回想するのはこれまでにしておいて準備を再開しようとしたらいきなり、

「マスター何をしているのですか? まるで家を出る支度をしているようにしか見えませんか?」

あの女が召喚した英霊から尋ねられてしまった。今は仮初めの主に従っているが、心はここにはない。向いているのはあの女だ。それは分かる……だからこそ、言いたくないのだ。だんまりを決めようとしたが、ここで爺さんまで呼ばれてしまったら面倒になるから、本当の理由ではないが納得できる理由を言った。

「あのな……ライダー、分かっているだろう。あの結界を学校にこれ見よがしに張っているんだ。いくらこの僕のことを甘く見ている遠坂だって、犯人である僕に辿り着くのは時間の問題だ。だから、屋敷には戻らない。屋敷に網を張るのは当然なんだからね、入る前に捕まる事態は避けたいんだよ。それに入れたとしても、いずれ乗り込むだろうね……そうなったら困るんじゃないの? 被害は及ぶよ、確実に」

敢えて誰かとは言わないが、向こうは十分に分かったらしい。一

考して、意見に賛同した。

「分かりました。貴方の意見に乗りましょう。ですが、ならば結果を解除すればよろしいのではないのでしょうか？ それならば、そこまで恨まれて討伐されると思いませんか？」

鋭い・けど、それだと困るんだよ。僕の願いを達成するために、アイツに憎しみの対象となつてもらわないと……まだ、腑に落ちていないようだがここで次の一手を言う。

「しょうがないだろう。この僕には魔術回路がなく、魔力を提供できないんだからさ。それにアレは脅迫を兼ねているんだ。今更、消すわけにはいかないだろう。……そんなに嫌なら、僕は降りようか？ 別にいいんだよ。戦いたくないと駄々をこねていて、このままでは僕に飛び火されかねないから、やつただけなんだからさ、さして思い入れも無いよ。あの女の願いを自分のわがままでブチ壊すつもりかい？ あの女の願いを最優先にすることを目標にしているお前がそんなことしちやつていいのかな？ 滑稽だねアツハハハ！！！」

「ツ！！！！いいでしょう。ですが、その笑いは不愉快です。今後はしないで下さい」

……決まった。あの笑いもやつたから効果は抜群だ。これで、アイツから討伐対象になれる日はもうまもなくだ。その前に目の前の英霊ライダーに殺されるかもな、そうでなくても危急の時に来る可能性は限りなく少なくなつただろう。それでいいのだ、あとは気付かれるまで学校生活を普通にエンジョイすれば大丈夫だ。残り少ない生活を満喫しなきゃ……楽しまなきゃ損だろう……アツハツハツハツ！！！！

——妹の地獄を察して道化となつた少年

——彼は改善をしようとしたが その思いが誰にも届かず絶望する

——何も出来ないのならせめて　せめて己の誇りだけを守る
うとする姿勢

——それは死だけは自分の手の上でありたいという逃げ

——彼は救われるのだろうか

SIDE　金ぴか

ええい、何故あの忌々しい過去を思い出さねばならんだ！！
我に屈辱を味わせたあの歴史は残されていないのに魂が忘れさせないのだ！　全くままならんことだ。この我に初めての敗北を味わせあまつさえあの男のもとにいたということは、言峰に夢で共有されては非常に不味い。弱みを握られてしまうではないか！！　だが待てよ・・・あの過去を思い出すということは、アレに関する連中が来るということか・・・だとしたら、好都合だ。あの男が死んで行方知れずとなった剣を手に入れられる機会が来たということになる。あの時は敗北したが、我には世界を切り裂いた剣がある。今度こそは、アレを私の財宝の一部にしてやろう！！　むしろ、破壊してやった方がいいのか？　不遜すぎる剣として処断して格の違いを教えてやった方がいいのか、我こそが英雄の中の王であると封印されているあの男にな！！

——二振りの剣を除いて全ての財を手に入れた英雄王は気付かない

——自分が怯えていることを　不安であることを

——慢心しているだけの者にアレは扱えないことを

——自分の言動がどれだけ喧嘩を売っているかを

SIDE 魔女と呼ばれし少女

私は公園にいた男を球体から通して見た瞬間、思わず声を漏らしてしまった。

「……………嘘でしょ？ 何であの男がサーヴァントとして召喚されているのよ？！！」 冗談でしょ！！ どうやったら呼ばれるのよ！！」

そう、どうやったら呼ばれるのか見当が付かないのだ。あの男、いやあの物語の人たちは座に就けられずこの世界に留まり続けさせられている亡霊でしかないのだ。何人かは肉体を失っていないが似たようなことである。精々あの姉妹だけだろう、神の保護を受けているのは。それも、鍛冶神とアテネが声高に『あの姉妹は私の神託を受けて、不十分であるが見事に任を成し遂げたではないか。それを世界が認めないからといって見捨てるのは如何なことか？ 恥さらしにすることは到底承知せんぞ！！』と主張しどうにか。今もなおあの家系は守り続けられている。神話に属し、座に就いている者たちはあの二人と戦闘したことがあり、かく言う私も手合わせならず、魔術を用いての戦闘を行った。それを通して分かったことがある。ああ、この人たちは今までの英霊を上回っている。・と。でも、彼女たちは自分たちの実力を高いとは思っていないかったようで、『私たちの剣は守りの剣としては強いですが、それほど強いとは思っていませんよ』

と姉が冷静に言うのと、妹もそれに同意するかのように大きく頷いていた。

『そうそう、姉さんの言う通りよ。守るものが無く攻めの剣を振るう人たちも多いからそこまで上位にいるとは思っていないわ！ 大体私たちだけよ。戦う技術なくしてあの剣に挑んだのは。残りの人

たちはそうじゃないけどさ」

「……確かにこの二人は元々パン屋の娘でしかなかったのは事実だが、それでも言いたいことがあった。唯の人間の娘が世界が、神々が恐れたあの剣を破壊したり、その対となる剣を扱える時点でもう既に十分偉業であると。普通であるなら、吞まれて消滅する」と。

それは置いといて、公園に立っているあの男こそ姉妹たちが言う攻めの剣を振るう代表格であり、しかも武器だけを振るう戦闘ならば筆頭と呼べる実力を有しているのは話で聞いた。彼ならばセイバーと呼べるに相応しいのだが、どうやら様子がおかしいように見える。やたらと不機嫌な顔になっているのだ。しかも誰かと話しているようだ。私たち英霊では見えない亡霊の類があつた男には見えているのだらう、成り立ちようからそれは納得できるが、何を話しているのかは分からない。どうやら見られているのは分かっているらしく、聞かれないように何らかのことを行っているらしい。話が一通り終わったらしく、ふと刀を抜いたが、その刀が何であるかはすぐに分かった。なぜなら、公園に漂う怨念や亡霊などが吸い込まれているのが分かったから。あの剣を刀に加工したものであることは間違いなかった。吸い込み終わると、男は闇の中に消えていったようにしか見えないが間違いなく空間転移を行っていた。一体どこに転移したんだろうか？ 謎だ。そのことが頭によぎっている中、「一体、どうしたというのだキャスター？ いきなり、大声出して慌てたぞ。何ぞあまり良くないことのようにだが？」

私の現在のマスターである少年が急いでやってきて、内容を聞いてきた。思えばこの少年と会ったのは三日前の夜、私を呼びだした魔術師を殺し、消滅を待つのみであった我が身を見つけて契約を結び直してくれたのだ。しかも、彼との契約で魔力とは別の霊力と言うものであつてそのためか運命によって失われた過去の姿に戻つたのだ。この時から、私は彼に本当についていくことを決めたのだ。聖杯に望むことは何もない……。ただ彼と一日も長くいたい・

・・・それだけだから。でも、今のままではそれすら奪われてしまう。だから、私はマスターに緊急事態が起きたことを告げた。

「すいません。貴方との約束を破ってしまったと駄目なことになりました・・・一成」

それを聞いた時のマスターはただ事ではないことが分かり、顔を歪めていた。ああ、そんな顔をなさらないでください。そうでもないとの男から貴方を守れないのです。

――神の呪いによって魔女と呼ばれし女は今はいない

――今その姿は闇を知らない少女となっている

――それは奇跡

――だからこそ守ろうとする　彼の命を　マスター奇跡を起こしてくれた人を

――それこそが自分にできる恩義だとそう思っているから

SIDE　生徒会長

「何と！！　あの男、御剣平四郎がサーヴァントと呼ばれているだと・・・なあ、それは本当なのか？　偶々、この地にやってきただけではないのか？」

私からそのことを聞いて第一声がそれであつた。まるで、彼のことを知っているかのようであつた。

「えっ・・・マスターは御存知なのですか？　あの剣と魂の物語の人たちを？」

「ああキヤスター、この寺は唯の寺では無く、退魔の寺であることは分かっていると思う。当然あの人たちのことはある程度は知って

いる。何せ、剣を求めただけで世界を超えてしまつて、世界の敵とされた存在になつてしまつたからな。しかも、あの人はこの国の生まれだ、こつちで退魔から狙われて悉く返り討ちにした経歴がある。もつとも、それを中心に行つていたのは混血の退魔らしいがな。この国にいる人たちであの関係者であるのは四人、富士の山を根拠地としている義賊の頭領は世界中を回つていて、そう滅多に見つからず、本拠地を襲撃しようがあゝの山は神秘の地、そう簡単には踏み込むことは当時許されなかつた。同業であるが、妖怪退治を主とする封魔の忍者もまた然り。あの騒乱で著しく衰えたことは事実であつたのだが、妖怪と言う怪異を相手にできる組織はそういになかつたから潰すわけにはいかなかつたという事情があつた。それに、朝廷が昔から抱え込んでいた名門であつてな、その保証を破る真似をしたら全退魔の敵となるという恐怖が先走つて動こうにも動けなかつた。結局、謀略でもつて一族を壊滅したはいいが、その後関係者で闇の狩人と謳われた本人にその首謀者たちは一族滅亡されたがな。最後に華吹雪と言われた剣士は、身を忍ぶ生活には長けていたようで追跡できずどこで生涯を終えたかも分からない。少なくとも拙僧が知っているのはこれぐらいだ。本当にあの剣士がサーヴァントとして呼ばれているのだな？」

「それは間違ひなく、レイラインが繋がっているのは分かりました。そして、前回の聖杯戦争終了地であの剣を抜いて、怨霊などを吸収させていました。おそらく、今あの公園は邪気に満ち溢れているでしょう。それだけの力を解放せずとも使えるのです」

それを聞いて俺は愕然とした。あそこに蠢いている負を呑み込むとはやはりあの剣は危険過ぎる。そして彼を召喚するとはそのマスターの真意が読めない。どうみたって従えることは不可能でしかない。自殺行為にしか見えないのだ。だから、ふとある仮説が思いついたので聞くことにした。

「なあ、キヤスターよ。あの人は魔術師に従うような御仁ではないようにしか見えないのだが、むしろマスターを動けなくさせ、魔力

だけを提供させるということを行っていそうだが、どう思う?」

一瞬だけ考えるような動作をしたが、それに納得したらしく、首肯した。

「確かにそうとしかいいようがありません。令呪ですら無効化することぐらい可能だと思います、あの剣は呪いでしかありません。それを使えるのでしたら、おそらくは。……ですが、根本の疑問は解決しません。貴方は知らないでしょうが、あの物語の人たちは座に就いていません。そして、普通の人たちのように魂がアラヤへと還っていません。ずっと、死後この世界に居続けているのです。どうやって呼ばれたのがさっぱり分からないのです。それに、わざわざサーヴァントにならなくてもいいはずなのです。あの方々は靈魂から自在に現界することができるのですから」

今とんでもない事柄が大量に出てきて、一瞬だけ頭が真っ白になってしまった。そこから回復すると、聞きたいことの前にやっておかなければならないことが生じた。

「すまん、キャスター………その続きをするのは少しだけ待ってくれないか? いつまで隠れて聞いているつもりだ糞親父!! ここからはあんたからも説明を聞かないと分からないんだ、出てきてくれないか頼むから」

どこにいろかは分からないが、間違いなくいるのは確かだ。すると、

「ふむ、どうやら鍛錬は怠っていないようだな……。宗一郎の教えがいいのかの。見直したぞ一成、だが甘いのか、儂の位置が分からんとは未熟じゃ」

そう言いながらも、親父殿は姿をさらしてくれた。だが、その顔は今まで見たことが無いくらい険しい物であった。

「事態があまりよくないの……。むしろ、危険度があの剣士で跳ね上がりおったわ。まず、言っておきたいことがある、夜の偵察は今後するでない!!」

聞く前からこんなことを言われた……。しかも、真顔で……。それに

微かに震えてもいる。

「どうしてなのかは聞かないが、そんなにあの御仁は不味いのか？」

「不味いというものをとつくのとうに超えておるんじゃ！！ キヤスターは分かっているようじゃがな。」

お主は軽くしか見ておらんが、世界を超えというのは並大抵のことではない！！！！ しかもじゃ、それが二十数人が同時にだ、ほとんどが魔術などといったものを知らん者たち。そんな者たちを世界が受け切れるだけの容量はない、だから消滅させようとあれこれしたと思われるが、全て失敗・・・死してもその存在が大きすぎるから、輪廻からも外されおった。自分たちの意思で消滅することと現世に居座っておるのが現状。まあ、そのうちの何人かは死んでおらんがな。かの者たちの言い分はおそらく『そんな都合で消えてたまるか！！ ふざけるのも大概にしる！』と言った類じゃろうが、今を生きる我らにとってみればいい迷惑よ。まあ・・そうなった元凶である剣は彼らが消えたらどんな動きをするか読めたものではないから、寺や神社の退魔は動かないという方針を決め、現在に至っておるんじゃ・・・少しは理解しおったか、あの者のことを」

ここまで感情を荒げる親父殿は見たことが無い。それにどれだけ御剣が異常であることも親父殿の必死な弁からもよくわかった。そこから更に、

「そうです、一成。お父様の言うとおりです、あの者たちは本当に強すぎて世界の理を突破してしまい、かなり不味い状況が続けて成り立っているのが今の世界です。彼らの誰かが動けば、必然的に世界も動くしかない、そんな綱渡りなことを行っています。しかし、この戦争においては世界はあまり動きが取れないのです。これが、魔術師たちが世界に干渉するために聖杯という依代をかけての戦争、その分必然的に世界の干渉はしづらいのです。そんな戦争に彼らのうちの一人、しかも実力では上位と言われる剣士が参戦する、何か企んでいると思えません・・それを裏付けることを行っている

のです。戦うだけなら、何故空間転移を行うのですか？ あの者たちのなかで魔術とは関わりがほとんどないと言っていい人がですよ！！」

キャスターからも危険であることを暗に言われてしまった。確かにわざわざ空間転移を行うというのは怪しい・・・事態は本当におかしな方向にどんどん進んでいるのが良くわかる。だからこそ、聞きたいことがある。

「……ふむ、ではキャスターよ、確か様子がオカシイと言ったな・それは即ちかの御仁がセイバーではないということではないとも取れるのではないか？ イレギュラークラスという可能性も大いに有り得るのではないか？ それぐらいならば、世界としては十分可能なのか……如何に思う？」

それを聞いた時、キャスターはポカンとしてしまい、親父殿はふむふむと感心、いや納得していた。そこから、脱却すると

「はい、それぐらいならばできると思います。イレギュラーあるいはアサシンとしてかもしれませんね・・・ですが、彼の代わりにセイバーと呼ばれた者がどんなであっても勝てると思います。あの人に勝つには、同じ当事者でなければ不可能なのです！！！！手傷を負わせることはできても、それは変わらない事象だと思っていえ理解して下さい・・・それほどの人です。それと、マスターを狙っても無駄だと思っていて構いません。先ほど言った通り、彼らは現界が可能です。何故なら、遺体と化した物でも、それを求めにきた者たちを返り討ちにしているのですから・・・間違いなく、パスがなくても行動が可能です・・・それも永久的に。現に私はそのことを見て知っていますから」

「さっきからいやに説得力があるとは思っていたが、見たということとは当事者の誰かと知り合いなのか？」

これを尋ねたら、言いたくない顔をしていたが、覚悟を決めて言い切った。

「・・・知っていると思っていたのですが、あの物語に関してオリュ

ンポスの神々の中で鍛冶神が神託を託した二人がいます。その二人はあの者たちの中では唯一神々の保護を受けていますが、それでも猶遺体を狙い奪おうとする者たちを返り討ちにしていた……その光景を見れる機会があったのです。そこで彼女たちと手合せではありませんが、実力を見させてもらいました。これは私の様にこの神話に属する者たちはほぼ見ています。それだから言えることがあります。彼女たちは自分たちのことを強いほうではないと言っています。が、十分にどんな英霊よりも上の力を有していると思います。その彼女たちが口を揃えて上位にしていると云っている代表格が彼です。ご存知ではなかったのですか、オリュンポスと剣と魂の物語の繋がりを？」

彼女から出た言葉は想像をはるかに超えていたため、答えられなかった。そこを親父殿が脇から、

「このことは知らなかったのお・・・我ら退魔が知っている者たちは、東洋が限界……辛うじて、南方の風奉りの巫女までは知っているぐらいでの・・・まさか神々が託宣を使っているとは驚きじゃのう……そこまで当時追い詰められておった状況がよう分かるわ」

自分が言いたかったことを代弁し当時の状況を推察し、しみじみと感じていた。だが、このままでは話が進展しないので

「親父殿、今は感心するときでないだろう。状況が最悪であるのは分かったが、一体何をしにあの剣士は空間転移をしたのが不明、確かにばったり会って気付かれもしたらおしまいなのも分かった。では、俺はどうしろというのか？ このまま黙って受けるというのか？」

……それに対しては両者は沈黙でもって答えた。これは正直かなりこたえたが、頭では理解できているのだ。単体では勝つことができない世界を超えし者・・・それもサーヴァントに勝てないときに取る手段が意味を持たない最悪の敵……どうやって勝つというのかが無いということがこれほどまでに身体を震わせるのかを分かった。

……この身が聖杯戦争に参加するのは偶然、消滅寸前のキャ

スターと契約したことがきっかけだ。しかし、御剣^彼が戦争に参加するということからそうではないと思った。なにやら、巨大な渦に挑むことをあらかじめ決められていて、それがこの戦争であるとそうとは思えないのだ。この中で、何を見つけられるかが俺に課せられているのだろう。そう思えば、厄介なことが増えたとしかかないのだ。とはいえ、どれも深刻なものばかりであるが………考えが纏まり、顔を引き締めて己の到達した結論（方針）を言った。

「……今までどおりの日常を送るが、今後巡回はやめにする。キヤスターはそこまで本気で陣地作成に力を入れなくともいい……どうせ破られるのがわかっていてのだからな。今のところこれでもいいか？」

それに対し、

「それしかないですね……確かに労力をつぎ込んでも、彼相手にはそれは無意味と化すでしょうね。あとはおそらく、彼は他の方々と連絡を取りにいったと思いますので、外部に探索の網を張っておきましょう。いずれ、あの方々が集まってくるといふ最悪な状況を考えた方がよさそうですね。途中で判明するでしょうね……彼らの狙いが、その時から対策を練るしかありません」

と肯定してくれて、一方我が親父殿は

「仕方あるまい……あの件についてはやれんのお、いつ何時来るか分かったもんではないからの。一成、儂は避難の準備を今からしておく。行動が即避難の態勢にしておけば、被害を気にせんでも戦れるしのお。じゃが……死ぬなよ、無理と思えばさつさと逃げろ！！だが、逃げる前に大聖杯がある空洞を必ず沈めるのじゃ！あの者たちに渡すでないぞ！！その準備もしておいておく、頼むぞ」

責任重大なことを言い残してこの場をあとにした。ふと気になったことがある、途中聞き取れなかった部分があるのだ。何か隠しているのは分かっているが、今は放っておくしかないのがまた事実なのだ。

――退魔師を継ぐ者は覚悟を新たにする

――この戦争で彼の役割とは何か　それを探るのも試練ではないのか

幕明 「気付きし者たち―警戒―」（後書き）

やっと戦争が開始します。その時にある人が不幸になると思ってください。個人的にちよつと事態の改善をできる立場なのに行っていないので、好きじゃないのが理由です。では

第四話（前書き）

申し訳ありません。まだ、戦闘シーンまでたどりつけませんでした。自分の文才の無さを再認識しました。一応、終了はさせますが、滅茶苦茶になると思います

第四話

SIDE凜

サウヴァント 戦場

御剣に冬木を案内した翌日、私はアサシンと協議をした。そこで決めたことは、戦争は夜に行われるのであるのだから昼間は日常通りに過ごすということだった。このことに対し文句を言うのではないかと考えていたのに、

「まあ、大丈夫だろう。『普通』の戦のように昼夜を問わずというわけではないからな」

と言つてすんなり通してくれたのだから驚きだった。ただし、『普通』ということ強調していたが。確かに、彼が言う戦とは違つてこの戦争は神秘を隠しながら行わなければならないので、基本日中での戦闘はしないのがいわば原則のようになっていたのだ。そのことが戦人である彼からすれば、気に入らないのだから皮肉を言っているのだと考えている。しかも、その言葉の続きに

「それに、お前さんにとってみればこの形式の方がいいだろう……昨日言つたが、魔術師たろうとする姿勢は見事だがそれをずっと続けたらガタが来るだろうよ。俺からすりゃあ、テメエは若造だ……まだまだ日常と呼ぶ空気を満喫しとくことは決して問題じゃあねえよ。逆に、死合いのときに箍が緩まれた方が迷惑なんだよ」

邪魔になつては困るから認めているのだということとをありありとわかることを言つてくれやがった。ただし、そのことで文句を言う気になれなかった。戦争中なのに変わらない日常が送れるのだから十分それで安らぎが得られるのなら言わない方がいいと思つたから。そんなことがあつてから学校に登校すると、まずは驚いた。まだ、完全ではないのだが結界の類が張られているのだ。おそらく昨日の内に張られたのだろう……だが、それ以上に不味いことになつたのだ。それは、

「おい、小娘よお……………確かこの学校にはテメエ以外にはいないとかぬかしやがっていたよな……………じゃあこれは何なんだ？　どうみたって学校にいるよなあ、他のマスターが！！」
アサシン
コイツだ。通学をすんなり認めたのは私以外にいないと自信満々に言っただから。それだから、

「マスターが通う学校になんらかの仕掛けをするのは同じく内部以外にしかないだろうな、それ以外の場合だと危険だけが大きすぎる。仕掛けをするというのはお前さんに対する警告や人質のようにするものであっても、それは性格を知っていなければ無意味だしないいだろう、別に文句は言わねえよ、今のところはだが。ただし、何らかの仕掛けがあつた場合はやることは分かっているよな？」

非常に気が重いことをしなければならぬことが決まってしまうのだ。確認をしなければ、私が殺されるということにもなっているのだから。そんな気持ちを立て直して、目的の人物がいるであろう場所の弓道場へと向かつたのだが、様子がおかしかった。いつもなら朝練をしているはずなのに、そんな音がしていなかったのだ。それに、親友といえる弓道部主将が道場の前にいて、顔を顰めていながらその隣に目的である少女と話し込んでいた。話が一段落して戻ろうとして、私の顔を見て怯えた目をしていた。つらいが、心を鬼にして

「間桐さん、少しお顔を貸してもらえませんか？　大丈夫、すぐに終わるから心配しないで」

……………結果はシロであつた。体のどこにも令呪がなかったのだ。これが分かつたときは、ひとまずホットした。これで、彼女は日常を送っているのだと分かつたのであるからだ。だが、先ほどの件が気になつたので、

「ところで桜、気になつたことがあるけど何か弓道部が慌てていたけど、どうしたの？」

それに対して、彼女は

「どうして、遠坂先輩にそんなこと言わなければならないのですか？ 弓道部の人でもないのに・身勝手すぎます！ いきなり連れてこられて肌を見せなければならなかったりと酷すぎます!!」

・・・どうみたって正論ではある・・・まあ一般の人であるならばだけど。それに対して全く回答せずに

「いいから、教えなさい!!」

観念して話してくれたが、それは驚愕すべきことであつた。一方そのやり取りが行われている中で御剣は

（これほどまでに他人行儀をお互いやるとは……救いようがない姉妹だな。自らで事態の改善を望むのは不可能だな。正直来るとこまでいかせるとというのが濃厚になったな。面倒臭えな、正直………だが、あの漢に免じて何とかしてやるが厳しい道だな……）と違つた決断を決め腹を据えた顔へと変化した。

SIDE 一成

「何と!!!! あ、藤村教諭が意識不明の重態になつて病院に搬送されているだ!!!!・・・本当なのか、衛宮？」

「落ち着けて一成！ 事実だよ、藤村組の若い人から聞いたけど、ついでに至るところが折られていたらしい。まったくどうやったらあの虎を倒せるんだ？ 今藤村組では、藤村の爺さんが中心になつて血眼になつて下手人を探しているらしい・・・というより、それはお前の寺には伝わっていないかつたのか？ てつきり伝わっていると思つていたぞ俺は」

重大なことを言つてくれた親友の衛宮は、ふと疑問に思つたことを尋ねてきた。

「もしかしたら寺には伝わったのかもしれないが、俺は聞いてないぞ。そうだとしたらおそらくは、親父殿が黙っていたのだろう。虎を襲うとはその者はよほど手だれの狩人だろうな、しかも愛用のスクーターも盗られているのだろう、それなのに目撃者がいないとは解せ

んな」

そう言いながらも、彼女が持たせたアミューレットを通して、

『どう思うキャスター？ これは間違いないく……………』

『ええ一成、魂狩りの犠牲になったかと。でも、わかりませんね』

『やはりおかしいと思うか』

『はい、魂を吸いつくせばいいのに中途半端であるから意識不明となったのでしょう。また、抵抗されたのかもしれませんが、至るところを折る必要はありません』

『あの藤村だと動きを取らせないためにやらざるを得なかったかもしれんが、やりすぎだ。むしろ、魂狩りより怪我をさせることを目的としていたとしか考えないと説明がつかん』

『…………あの人本当に人間ですか？ 今の言い方からすると、やはりマスターもそうとは思っていそうに見受けますが？』

『…………一応人間ではあると思うが、人間というくくりに入っているのか超えているのか正直分かんのが実際のところだ』

『…………この二日間を通して見た私からしても範疇を超えていると思っていましたが、手加減していたであろうサーヴァント相手に抵抗できるとは、凄いですね』

『そこを問題にしていると延々に終わりのないことになりそうだから、話を続けるぞ』

念話をしていた。まだしようとしていたら、

「……………！ おい、一成聞いているのか？」

親友から心配そうな声をかけられてしまった。それに対して、平気だという顔をして

「ああ、すまん聞いていなかった。誰がやったのかと考えていてしまつてな。衛宮よ、何を言っていたのだ？」

それを聞いて完全に納得していない顔をしていたが、

「…………今のところホームルームと藤ねえの授業は自習だつてさ。今職員会議を開いている最中で、しかも爺さんを交えてらしい。授業は果たしてできるのか？」

「……天文学的数値で無理だろう。職員会議という名の責任のなすりつけあいになっているのだろう。それを見て本気で怒りだしたら、どうにもならんと思うぞ。もしかしたら、そうなった場合宗兄がどうにかしてくれるかもしれん」

「葛木先生が？　……まあ、確かにそれぐらいはできそうな気がしなくもないな、あの人の場合。それに賭けるか」

ハアと大きくため息をついて、やっと衛宮は席に着いた。そのあと、念話を再開した。

「結論を言つと、少なくとも藤村教諭を襲ったサーヴァントのマスターはこの学校内にいるんだが、果たして結界を張らせたのと同じ者かは不明だな」

「そうですね。不明な材料が多すぎると言っていていいでしょう、ところであの教師を襲ったことを指示したマスターに見当がついているのですか？」

「ああ、それだけは見当がつく。何せ、人気はあつたのだから恨みを持つ者など限られているのだからな。本気で憎悪の視線を向ける者はあの者だけだ」

念話でありながら、視線を青い髪の少年へと向けた。俺の視線を通じて視た彼女は納得していた。

「確かに、あの少年ならやりかねません。見ていない時に見せるあの憎悪は本物です。何が理由かは知りませんが」

「かくいう拙僧も気付いてはいたが、さっぱり見当がつかん。それにだ、アイツは人を見下す言い方をしているが、その実結構人を見て言っているから馬鹿ではない。なら、理解しているはずだからあのような真似はしないと見える。もしかしたら、力に溺れているのかもしれないがその素振りが出ていないことからもしていないことは窺える。学校内で、マスターになりそうな者で馬鹿な真似をする者はいないのだ」

「それについては同意します。魔術師たる少女はする必要がありませんし、貴方の親友がなったとしてもこれは許すはありますがありませ

んから。まあ、結界の方は解除こそできませんでしたが一応仕掛けていますから気にしなくてもよろしいのでは？　まだ、重大過ぎる物事がありますから』

『そうだな』

これで念話は終了したが、その視線の方向は変えなかった。向けられた少年は気付いていないらしく、周囲の女子と話し込んでおりその顔はいつも見掛ける物であった……だからこそ、胸の内で嘆息する。

（お前が襲うことを指示したのであろう、慎二よ。学校で時折見せる憎しみ・怒りといった負の感情はここでできた物ではあるまい。そして、その件については誰に対しても聞かれても答えない……言ったところでもどうにもならないという顔でだ。それは被うことができないとでも言っているつもりか、真桐の家でのことは？　一体何が起きているのだ！　俺では無理で衛宮でしか不可能なのか、その業は？）

そんなことを考えていると、教室の扉が開いて教師がやってきて授業は行うと言ったが、放課後の部活動は原則時間通りまでを厳守するようにという通達が出た。宗兄……上手く宥めてくれて感謝したい

SIDE 御剣

マスター 小娘が授業とやらを受けている間は暇でしか無いので、結界の起点がどこであるかを探していた。数か所は見つけたが、それが何であるかはさっぱりなので放置しておき、手持無沙汰で苛立ちが増していた中、アイツらがやってきたことが分かり、いる場所へと向かった。そこにいたのは予想通りの連中で一人を除いて、全員殺気立っていた……暇であるよりはましだがこれはこれできつい……だが、己が決めたことを説明して押し切って置かないとな

「この阿呆侍！！　お主、言っていることが分かっているのか？

何故、戦争とは呼べない代物を長引かせるのだ！！ 延ばしたところでいいことは一つもなかるうて」

「然り！！！！ その者の言う通りよ。御剣平四郎、何があったのか聞かせてもらうぞ、如何なる所存で不幸しか撒き散らすことしかできなくなつた願いの杯をかけての闘争を延ばそうというのだ？

納得出来ん物であつた場合は…………… 承知しているのであるうな？
！！」

「吉光さん…………… 納得するしないは問題になりません！！！！
そもそも、私たちが求めていることに必要なことは具現化、具現化するに必要な分のサーヴァントを倒せば事足りるはずです。夜しか戦いができなくとも、遅くとも一週間あれば達成できます。大体、七十年前からおかしくなっているのですよ、この聖杯は！ 前回の時の風の悲鳴は相当なものでしたが、このところの悲鳴はそれを遙かに超えています！！ 災いの源と化している物は、私たちの要件が済み次第速やかに破壊すべきです…………… もう二度と使うことができなくなるほどに！！ 一体何があつたのですか、貴方が延ばすと決めたことの理由は全てのサーヴァントと戦いたい以外に別なのは分かっていますか？」

「さすがは風を奉りし巫女だな…………… この戦争の情報収集に私以外に卍党全員を用いた吉光と退魔であるが故にこの地へとやって来ていた闇の狩人のタキのように参加していなかったが、風を通して概要に気付くとはな。確かに貴様は察しているだろうが、この戦争とは到底呼べん争奪の争いは回数が増える毎に、劣化してきている…………… それに決定打を与えたのは三回目だ。アインツベルンが何をトチ狂つたのかは謎だが、サーヴァントとして呼んだのがこの世全ての悪を冠する神を呼ぼうとして全ての者に憎まれた男が呼ばれた。その者のせいで完全に聖杯は修復不可能なまでに歪んでしまったのだ。我々以外の全てを呑み込めるモノとなつてしまっているのは事実だ」

「では、何故それを分かっているながら承諾したのですか？ 時の彼

方を望みし転生者ザサラメール!!」

「まず一つ目だ、これは皆で合意したことだが過程に関する事柄の決定権は呼ばれた者にあるということだ。忘れたとは言わさんぞ! 異議を唱えることは可能だが、強制は許されない……そのようなはずになっているのだから」

「……ッ!!!!!!」

合意条件の持ち出されて、三者は言葉にならない唸り声を上げて沈黙してしまった。何故合意文書などを作ったかは確かに聖杯の具現化さえあればいいのだが、それぞれの思惑は少なからずあるのも事実であるからだ。そして、戦闘の最中であるの剣などを用いたら座に還ることがないことは確実であるから使用制限を置いておかないと、そもそも具現することができなくなるという本末転倒な事態だけは避けたかったのだ。この手段は一度しか使えない・だから今まで直接行動は慎んでいたのだ。失敗は許されないのだから、呼ばれた者の独自裁量権は保障していた方がある意味安全に事が進むことを見越していたのだが、このような問題の場合対処ができない。招かれた者の好き勝手が可能なのだ。だから、揉めている。筋として正しいから文句が言えないため、三人とも黙るしかない。それを分かっていながら、ザサラメールは話を続けた。

「筋問題として、中心なことはそれしかあるまい。あとは枝葉ではないからな……二つ目は何興味だ。貴様らとてこの男の本質は分かっているはずだ、元々我らの中で英霊になれなかったことを心底がっかりしていることを。過去の大英霊と死合いができないことを悔しがっているからこそ、すぐには終わらんとは読めているはずだ。そのことはタリム、貴様自身が言った。私は理由を聞いて見てみただよ、コイツをその気にさせた者をな!」

あとはお前が説明することだという顔をして、沈黙した。やれやれ、説明といった物をするのは大嫌いだ、振るわせたという事実を言えればいいのだから簡単だ。さて始めるとするか、あの阿呆姉妹の問題解決のための方策をな!!」

……俺から現実問題不味いことを聞かされ、その中で何をする予定も言われ、向けた顔は

「「何故そこまで面倒な手段をとるのか（ですか）、貴方（貴様・阿呆）は？」

という至極当然のモノであつた。一人は昔からの蔑称を未だに言い続けていて、決着付けてやろうかと本気で一瞬考えてしまったが、まずは話を続けることを最優先とした。

「例え何言われようと、こればかりは譲れねえからな。そこで言っておく、今いるのはタキとタリム……… テメエらだけが、浄化ができる連中は抜うことだけはするんじゃないやあねえぞ！」

それを言つた瞬間、特にタリムからは怪訝な顔を向けられたが、これを無視して話を続けた。

「あのなあ…… やつたところで意味が無えんだよ。むしろ、下手にそういうことをしちまったら動かなくても何とかなると思って、将来またそういう目の中心になっても動かず討伐されるというのがオチになりそうな女で…… やつた行動が無意味となるのが非常に高い。まあ、見たところでしかないがな」

理由を言つたら、考え込む仕種をしてやつと口を開けた

「ふむ…… お主の言わんとすることは何となくは分かるが、相当重症なのか？」

「非常に悪い、いや悪過ぎて手に負えねえガキだ！！ 逆によお、よく今までそんなガキを構つて面倒見ていた坊主の方が俺からすりやあそつちの方が惨めで、道化を演じさせられていたとは思えないんだわ。それもおそらく俺の勘なんだが、本人は自分の立場が一人から道化だと笑われているのは気付いていたんだろうな…… それに裏づけるモノが坊主の中に蠢いているのを見たんだよ。それでもやっていたんだらうがな…… だけどよ、もう一人の方から自分は道化だと無意識に言われても、手を出していなかったというのがある亡霊から聞かされてな。本当ならガキ二人を始末すれば事足りるん

だが、坊主に免じてどうにかしてやりたくなつたんだよ。その代わり、今までのこと全て清算するという荒療治の方法を執るが……それぐらいはやっていいだろう？ そっじゃなきゃ、あんまり過ぎて少しは連中に味わせてやろうという気持ちが生きたんだよ」

言つたことを吟味しているのか、黙りこんでしまった。それから、しばらくすると吉光が感激の表情おつかない顔をして間近まで迫ってきて

「よからう、お主の好きにするがよい。だとしたら、我ら卍党がすることは決まつたな・・できるかぎり喰われる者の数を減らすことに集中するが、結局この街の長を決断させることに持ち込むしかないか」

承諾をすんなり認めた。次に一番小言を言いそうなアイツが

「やれやれ・・・それでいくと間違ひなく美咲町からやってくるではないか。こちらにも人数がないと面倒だな・・退魔には効果は絶大な結界が十分に張れるのだが、星に認められた者どもにはあまり効き目がないのだがやるしかないか。安心しろ・・・お主に文句を言う二人は私がしておく、死合うことのみ集中するがいい」

いやいやという様な言い方をしているが、表情は真逆であり

「そっいえば、風の中にも万事上手くいくと言つたのを伝えてくれたのがありました。もしかしたら、その少年が鍵かも知れませんか。少し見ても大丈夫かも・・・わかりました、あなたの方針に何も言いません」

この中で最も反対する奴が賛成に回つてくれた。これで、後に来る連中の説得を任せられるから肩荷がおりてホツとした。

「ならば、その者は生かしておく必要があるな・・・貴様の立てた方針を進める上では、下手に死なれたら結局意味が無くなるからな。その者を専属的に監視する必要がある・・・そちらの件は私がしておく、これからが忙しくなるぞ」

最後にザサラメルが締めて、あと二・三の件を話し終えて、俺はマスターがいる学校へと戻つた。帰つてきて早々何をしていたか聞かれたが、小娘の追求から逃れるのは簡単であり、はぐらかした。

マスター

小娘の方針は夜遅くに学校に来て、結界の中身を確認するなどの行動を開始するつもりで、俺は腕がなってきた。おそらく、この動きで何も起きないわけがないと実感していたからだ。さあ、俺を満足させる敵はいるのか、楽しみだ。

サーヴァント

御剣が去ってから、戻って来ないのを確認すると、四人はまだ談話をしていた。

「あの阿呆が動かせたのは大したことではあるのだが、しかしまあやることも多くなってしまったな。しかも、上手くいかなかった場合は最悪でしかないという、究極の二択に絞り込まれておる。ところで気になったのだが、以前誰が真祖を返り討ちにしたのだ？ あ奴が痛めつけたのは、死徒の姫君だったはずだからのう」

「確か、あの野人であつたはずだ。育て子のいるところに戻ろうとしたところで遭遇して、これを怪力で粉碎したと聞いたが」

「ちよつと待つてください・・・御剣さんと屋敷で会合したとき来てなかったのですか、あの人は？！」

「・・・来なかったな、あの男は。少なくとも、私とは距離では最も近かったのにいなかったな・・・閣下からも連絡は来なかった、一体何をしているのだあの野人は？！」

その言葉で、全員が黙ってしまった。彼らは何をしているのかということについて一応見当が付いているのだが、言いたくないのである。現実問題、それを本気でやっていることを認識したくないといったのが正しいのかもしれないが。このままでは埒があかないのは事実で、誰がそれを言うかを無言での遣り取りをしている最中なのだ。腹を括って、卍党党首である吉光が徐に口を開いた。

「・・・もしや、アヤツはまた同じことをしているのではあるまいな？　いくらなんでも遠すぎるだろうに・・・そもそも間に合わせる気持ちがあるのか？」

心底うんざりしている口調であつた。

「・・・多分、本人は間に合うつもりだと思いますよ。あの

人は足止め役ではなく、ここ冬木での活動が決まっていたよな？」

「うむ・・・そうなっているのだが、確かに向かう前に私の居館に來いと合意内容には記したはずなのだが忘れているな・・・閣下はどうでもいいと思っているのだが、實際あの男の方針で行くとするやはり戦力はあつても問題とはなるまい。成家一門をこちらに回してもいいぐらいだぞ・・・間違はなく、冬木市手前での戦争が今までの抑止の守護者何百人のと匹敵するだろうな。その際、あの野人のパワーは必定だ。それ以外においては目立ち過ぎるがな！巫女よ・・・コンタクトできるか？あの一門は状況次第で来る来ないを決めていたからな・・・貴様からなら聞くのではないか、最低一人は？」

「確かにザサラメル、主の読み通りにすぐに来るだろう。だが、それよりも前に言いたいことがあるのだが・・・あの夫婦は一体何をしているのだ？！！遅すぎるわ！！」

タキのその言葉に対して三人とも是の頷きをした。

「全くだ、仲が良いのは結構だが、我らでまともな結界を張れる者は限られておるからな。出来る限り速やかに来て欲しいのだが、どこで油を売っておるのだ？！」

「しかも、風で探ろうにもあの方は陰業術にも長けていますから、實際探すのは一苦労なのでしたくありません」

「——行く先々で余計なことをしているのだろう——琉球で知り合いと合流してからはすぐ来るだろうから放っておいて構わんだろう。やはり、問題はあの野人だ・・・泳いでいるのか、踏破しているのかは不明だが、早く来るよう言えばすぐに来るだろう・・・いや来させてやる他は無いのか？」

本来現地に來るメンツについての話を一通り済ませて、会談を終わろうとしてそれぞれ散会しようとしていた。吉光は卅党を連れての哨戒を夜中都市部で行い、タキは結界の起点を作り上げるつもりで市の外れへと足を向け、タリムは淀みし氣を抜うために新都へと進

もうとしていた。そしてザサラメールは、特にヨーロッパで遅滞目的を行う面々に今後の方針を伝えるために空間を開いていた。その時に、喧しく慌ただしい足音が向かってくるのを察して、彼らは歩みを止めた。

「・・・ハア、ハア、ハア・・・御免！ 遅くなっちゃった。もう会合終わっちゃったの？」

「・・・相変わらず姉と違って落ち着きが無さ過ぎるぞ、カサンドラよ。見れば分かるう、終わってそれぞれの持ち場へ向かうとしているのだが」

この姉妹と縁があるタキは呆れた口調でカサンドラの言い分を切つて捨てた。それで終ろうとしたが、

「これは奇っ怪な事よ、姉と喧嘩して無理やりでも来るのは読めてはいたのだが、今のお主は怪我をしているようには見えん。あと、早過ぎるな・・・何があつてこれほどばかり早く着いたのだ？」

「見当は付くが、オリュポスの意向通りとは違った方向にいくことだけは言っておく」

「やっぱり今まで集めていた分、分かっているじゃない・・・ちよつと待つて、もしかして長引かせる気？！！ どういうことよ、それは！」

終わつた後に来る者はいささか面倒だということを再認識した、四人であつた。

第四話（後書き）

少しキャラのステータスを独断と偏見で判断し載っけておきます。
その点はよろしくお願いします

タキ

性別：女性

身長：170cm

体重：53kg

外見：ソウルキャリバー4のイラスト参照

属性：秩序・中立

能力

筋力：B 魔力：A+ 耐久：B 幸運：C 敏捷：A++ 宝具：

C
EX

100

スキル

対魔力：B

気配遮断：A+

対呪い：EX

直感：A+

見切り：A+

心眼（真）：A+

鑑定眼：A

威圧：EX

斬鉄：A++

封魔：A+

退魔の一族の出身であるため、人ならざる者との戦闘において全ス

テータスを1ランク上げる。また、霊的存在に対しては2ランク上がる。

仕切り直し：B

戦場からの離脱

吉光

性別：男

身長・体重：不明

外見：ソウルキャリバー4のイラスト参照

属性：混沌・善

能力

筋力：B＋ 魔力：C 耐久：A 幸運：B 敏捷：A＋ 宝具：

C
C
EX

スキル

対魔力：C

気配遮断：A

対呪い：EX

直感：A＋

見切り：A＋

心眼（真）：A＋

鑑定眼：A＋

威圧：EX

斬鉄：A＋

異形殺し：C

仕切り直し：EX

戦場からの離脱 彼の場合卅党一族の忍術を用いるため、脱出はどんな場合でも可能

カリスマ：B

義賊集団卍党の頭首で卍党の理念に賛同した者は世界各地にいるため、一国を率いるのと同等と判断

宝具

卍党秘奥儀：A++

第四次聖杯戦争のバーサーカーの宝具の様に他人の宝具を自分の者として接收することが可能。盗んだ物全てが彼の持ち物となる。

ザサラメール

性別：男性

身長：180cm

体重：77kg

外見：ソウルキャリバー4のイラスト参照

属性：混沌・中庸

能力

筋力：A 魔力：A+++ 耐久：A 幸運：C 敏捷：B- 宝

具：C/E X

スキル

陣地作成：A++

自分に有利な拠点を作成できる。彼の場合、忘れ去られた古代王国の技術を使えるので大神殿や神宮を超えるモノができる。また現在も生きているため、現代要塞としての機能もある。・それも広域で

対魔力：A

対呪い：E X

直感：A+

見切り：A+

心眼（真）：A＋

鑑定眼：A＋＋

威圧：E X

斬鉄：A＋＋

道具作成：A＋＋

高速詠唱：A＋
シングルアクション

一工程でどの魔術も行える。さらに、忘れ去られた古代王国時代の魔術も使用が可能

タリム

性別：女性

身長：144 cm

体重：42 kg

外見：ソウルキャリバー4のイラスト参照

属性：秩序・中立

能力

筋力：C 魔力：A＋＋ 耐久：B－ 幸運：A 敏捷：A＋ 宝

具：C X E X

スキル

対魔力：B

ただし、風属性は全て無効

対呪い：E X

威圧：E X

見切り：A＋

心眼（真）：A＋

斬鉄：A＋＋

風の加護：E X

風を奉る巫女であるからこそその補正。自然の摂理に反する存在や魔あるいは属性が悪または混沌を持っている者との戦闘において筋力は2ランク上がり、魔力もE×となる。さらに、風を介在して直感鑑定眼の効果も付加され、どちらもA++ランクに相当する。風を自由に使える。

第五話「茶番の開始」

「今何と言ったの……カサンドラ？」

「だから姉さん、落ち着いてよ。アタシだって、最初は驚いたけど説明聞いて納得したの。だから説得宜しくね」

遅れて会合に間に合わなかったカサンドラは、ザサラメール等から聖杯戦争下での自分の役割を聞いて、今まだエウリュディケ神殿に在るであろう姉と今後の動きを伝えている真つ只中であった。正直これをする事に気が重かったのである。彼女自身は本来早く片付けるつもりを考えであったのだが、何故延ばすかの理由を聞いてそれに同調した。しかし、御剣が立てた案はかなり危険度が高過ぎるのである。上手くいかなかった場合は、最悪の展開しか残っていないという究極の二択である。そんなことを伝えたら、姉が卒倒するのではないかという心配よりも、自分たちの上の方に何言われるか分かったモノではないことを理解していたからであった。でも、決着を延ばすということは何としても通さなければならないという気持ちは持っていた。報われない者に本当の意味での救済をもたらすためには必要なことは時間、ただそれだけというのは分かっていたから。

「あのね……正気なの?! ただでさえ厄介なことになっているのにそれを態々延ばして悪化させてどうするのよ?! 現にこの念話はおそらく筒抜けになっているわ! 貴方も少しは苦勞をしないさい

!!」

「いや……そこは元々神託を受けた姉さんに頼もうかなーって。だって、アタシがしたら余計面倒になるの分かっているもん」

しかし、直接自分の口からは言いたくないのも事実なのである。だから、姉に任そうとしているのだ。要は足掻いているのである。この姉妹とオリュンポスとの関係は深いのだが、元々神話が姉ほど

思い入れが無いのだ。ただ姉の負担を減らそうと考えたからこそ、剣と盾を手にしたのだ。正直言えば、神々が口を出してくることが嫌いである。ソフィーティアはそんな妹の心情は分かっているのだが、決定的な一撃を口にした。

「私は、会合そのモノに出ていないのよ。少しはその残り香を持っている貴方でないと届かないわ！！ 面倒になっても貴方がする義務よ。義務を放置することは許されないわ！ それにどうせ説得頼まれたのでしょうか？ 自分からしないと意味ないことぐらい承知の筈・グダグダしないで早くこっちに帰って来なさい！」

そう言っカサンて念話を自分から強制的に断ち切ったのであった。あの子とて分かドラつているとそう信じたからこそその行動である。

しばらくすると、まばゆい光が輝きそれが晴れると厭々の顔をしている妹がいた。来たことに安心して

「さあ行くわよ、カサンドラ。大丈夫、私がフォローしてあげるから思ったことだけを言いなさい！ いいわね？」

それに頷くのを確認して、難関な神々の説得を行うべく神託をもたらしたヘパイストスがいる座に向かう。上手くいくことだけを考えておかないと……

……フム、予想通りだったな。欧州にいる面々は計画の完遂が長引くという事を聞いても、それほど反発をする者はいなかった……一人だけは例外だがな。あの怪物にしてみれば、長引くということは主の宝物殿に向かってくるであろう教会の狗が増えることは確実だからな。あの狗どもの血で宝物を汚したくないのは分かるのだが、それは地理的に近かったことが災いだ。どうにもならんことだ。ただその点は十分カヴァーできると思っただが……理性を取り戻した怪物が新たな番人としてそこにいるのだ。また、私が気付いていないとでも思っているのか？ 貴様がイタリア軍や地中海に面している国々の特殊部隊が財宝目当てにやってきて、そ

の者たちを唯一人も返さず彼らの武器を接收して新たな罫を張り続けていくことも。特に第二次大戦中、イタリア軍からその話を聞いて来た独軍、米軍、英軍も始末していることぐらい分かっている。私は連合軍には要らぬことをするなと警告したのだが、全く聞き入れず、あの結果だ。拳げ句の果てに私に依頼してきたが断つたのだぞ！！ 少しはこちらの無駄な苦勞に感謝して欲しいのだが……まあ、いい。

それに、最悪埋葬機関の連中が来ても造作が無いだろうに。自分で手を下せばいいだけのこと。一人、当代ナルバレックは当時の当代を仕留めた告死鳥が『女ねえ……面白そう！！ ねえねえ、アタシが手伝ってやろうか？ 今も連綿と続いたあの系譜がどんな風になったかが見てみたい！』と言って、協力する気はあるぞ……
……えらく自分の欲望を満足するためだから本気で向かうだろう。それ自体が嫌だろうが、下手したらアーティファクト狙いで王冠も来かねないのだから戦力はあるに越したことはあるまい。我慢しろと言いたい。残りの面々も足止めする準備と目的の場所へと移動し始めている。ただし、あの男がアレを抜くのはそう遅くは無いと言ったが、全員が半信半疑であることに頭を悩ませた。あの不遜で傲慢なだけのアレが御剣を見て大人しくしている可能性などほとんどあるわけがない、剣を財の一部とするか、壊すかは分からんが序盤であることを気にしないで動くはずだ！ 元々動いてくれないと困るのだ……貴様だけならば放置しても構わんが、前回の戦争と呼べぬ決闘で動いた貴様のマスターが邪魔なのだよ！！ 碌でもないことを企んでいるのはこちらからはお見通しだ。邪魔者は速やかに排除する必要がある……そのためにはアイツが動かなければ違和感と余計に感じさせるのだからな。唯でさえ、あの男が名こそ言っていないが、終焉の地で抜いたせいでコルキスの魔女が警戒を強めているのは分かっているのだ。先程から此方の動きを探ろうと使い魔こそ出していないが、水晶などを用いて監視していることから窺える……だが、以前会った時とは別の魔力の流れを感じ

るのだが、何が起きたのだ？ 別に構わないが。どうせいずれ顔を
見れる機会が巡るだろうからな。

あの野人と連絡を取るのに骨を折った・・・あの男はやはり、
太平洋を自力で渡っていた最中であつたのだ、手間がかかることを
普通にするから困る。言えば、急いで来るだろうから今夜にはこの
地へと到着するだろう。少なくとも、それなりの戦力は集まってい
ている……………あとは例の術式を刻み終われば、することはこの地
に来るだろう面々を歓迎することが残った大仕事だ。さて今までに
少しずつ行ってきたため、大方終っている。一日をかければ終
る、暇をつぶすためのことを考えておかなければな。

油断ではなく決定事項の如くかのように独白している彼の眼にう
かべているのは笑みであつた……………

——それは夢だつた。

今よりも遥かに空が澄んでいた時代、場面はとある田畑であつた。
百姓が共同して農作業をしていた、年貢を納めるため、食い繋ぐた
めに必死に働いているのだ。大人たちが黙々と作業している中で目
立つ少年がいた……………少年と言っても、年齢は自分よりも大分違うぐ
らいだろうが、大人びていて、大人たちに負けないほどの体格を有
していた。その少年が力があり余っているのだろうか、楽しく農作
業をしていた。若いだけあつて少年がしていたところはもう終わつ
ており、隣の人の手伝いをし始めようと動き始めていた。その姿を
見て、ある百姓が

「オメエのこの末っ子は、相変わらずだな・・・力はオラたち
よりも下手したらあるし、もう少ししたら背丈は間違いなく抜くだ
ろうし、おまけに疲れ知らずときた。いい子ができたでねえか、将
来はいい百姓になるだろうな」

その言葉に周りの人たちも同意したような発言をしていた。その

言葉を聞いて、おそらく少年の親であろう男が照れを誤魔化そうと
していた。

「アイツにしてみれば、畑なんぞ遊びに次ぐいい運動としてしか考
えていねえ。しかもあんだだけガタイがいいぶん、食う量も半端ない
から良いか悪いか分かんねえ」

そんな会話ができるほどのどかな時間であつたが、それは一時の
モノでしかなかった。ある一人の男が急いでやってきた……その顔
は酷く青ざめていた。

「おおい、大変だ！！ この近くで戦が行われるぞ！ 人が集まり
だしている、早いとこ準備しねえと」 それを聞いた人たちはうん
ざりした顔を浮かべていた。

「またか……… 殿様は一体何をしているんだ？ たかが家臣の一
人を討つのに一体何度戦を行わなければならんだ？ いい加減に
決着を付けてほしいものだ。さつさと荷物を持って山の中に逃げ込
むのじゃ！」

と村の中の年長者が言つて、それに合わすかの様に大人たちは
動いていく。

「ほれ、オメエも爺っ様の話聞いただろ……さつさと家に戻つ
て準備するぞ」

父親は話を聞いて突つ立ったまま動かない我が子に動くよう促し
ていた。父親の言葉で振り返つた少年が浮かべた顔は大人たちが浮
かべたのとは別のうんざりしていたものだった。

「なあ親父……また荒らされるのかよ！ とうにかなんねえのか？
！」

それを聞いた父親は首を横に振つた。

「無理だ……せつかくお前の腕力で大分持ち直したこの田畑だ
が、諦めろ。殿様たちの戦の場所を変えて欲しいと言っても通らな
いだろう。話は終わりだ、とつと準備するぞ！」

まだ納得をしていない顔であつたが、トボトボと家に戻つて行つ
た。この時代、戦が行われる場所に近い所に住む者たちは、巻き込

まれないよう山の中などに逃げ込んでいるのだ・・・そして終るまでじっとしなければならぬのだ。戦が終わる、彼らは自分たちの村に戻ってみると、そこはやはり荒れ果てていた。

「こんなじゃあ、この年の年貢は納められねえ・・・どうやって食べていけというのだ?! いまは夏の終わりだぞ!」

ある大人がそう嘆いていたが、誰もそれに対して何の反応も起こさず、諦めの顔を浮かべていた。だが、この荒れ果てた田畑を見て少年は無表情であった。彼が農作業に従事してからというもの、何度も戦が起き、その都度己の腕力で耕し直していた。しかし、その都度戦で荒らされて元の木阿弥になるのだ。始めは喜んで耕し直していたが、今ではそんな感情は起きなくなっていた。今彼の中で浮かんでくるのは馬鹿らしい、ただそれだけであった。

「……荒らされて苦勞するより、荒らし回っての方が楽じゃねえか! ! ! ! !」

それからしばらくして両親が病気で他界すると、彼は迷わず鋤を捨てて落ち武者狩りで手に入れていた刀を手に取り、家を振り向くことをせず村をあとにしたのであった・・・

その夢の続きが気になったのだが、

「・・・・・・ろ! ! ! ! ! しろ! ! ! ! ! マスターいい加減に起きやがれ! ! ! ! !」

アサシンの怒鳴り声で中断せざるを得なかった。あまりの大声に耳が痛くなったので、

「うるさいわよアサシン!! 元はと言えばアンタが寝ておけと言ったから寝てたのよ! 今更何を言うのよ!」

順を追って説明すると、授業が終わり家に戻った後、人が全員いなくなるであろう時間に結界のことを調べることを決めていた。そしてそれまでの時間をどうするかということ、

「暇な時間を潰すなら寝るに越したことはねえぞ、マスター……と

「いうよりお前は寝とけ」

「はあ？ 何で断定なのかしら、理由聞かしてくれろ？」

「オメエのうつかり具合は実質一日で良く分かったからな・・眠くて大事な場面でヘマされたら困るんだよ。不確定事項はなるべく排除したいんだ・・・分かるか？」

その言葉にウツと言葉を詰まらせた。私の顔を見てもアサシンはさらに話を続けた。

「それにだ、俺を呼んでから万全の体調じゃあないだろう。少しでも休んで回復してもらいたいんだが」

それを聞いて、私は驚愕の顔を浮かべていたのだと思う。アサシンの言う通り、召喚してからというものの未だに魔力は完全に戻ったとは言えず、さらに身体が重く感じるのだ。

「・・・・・アンタがそれに気付いたということは、理由が薄々分かってるのよね？ 言って頂戴！！」

苦虫を噛んだ顔をしながらも、

「おそろくだぞ・・・俺自体を呼んだことが原因だな。はじめに言った通り、俺と世界の関係は最悪と言っていい。俺の消滅のためなら何だつてしてきたからな生前・・・サーヴァントして召喚されたことを好機と見て、干渉しているんだろうな。お前のことなんか考えずに」

最悪の解答であった。これだけでも、改めて世界と対立することがどんなことを招くのかよく分かった。

「はあ……本当に何やったらここまでの自体が起きるのかしら？確かに身体を休めたほうがいいわね。時間になってくれたら、起こしてくれるわよね？」

「ああもちろんだ。オメエだけに任したら、朝になって活動できなかったという事態になりそう、いやなるのは分かったからな……そこだけは安心しとけ」

耳が痛くなることを平気で言ってくれるが、彼を御せる方法が分からないから黙って聞くしかない。

「あとな……………俺のことを知るのはそう先の話じゃないぞ」

眠る準備をする私を振り返って見せた顔は寧猛な獣が得物を待ちかまえた時に見せる笑みであった。

そして、今に至ったのであった。時計を見ると、6時半……………学校に最後まで居残りができる6時を過ぎていて魔術師として行動するには何の問題がない完璧な按配であった。

起きてから最低限のことを済まして学校へと向かう中、これから下調べをしなければならないのだから、概要を知るのはいつになるのかしらと頭を抱えていた。アサシンは私を運んでいながら、その事に気付いたのか

「安心しろ、結界を発動させる術式の枝のいくつかは探せたぞ。そんなに時間はかからないと思うぞ、着いてから考えようや」

「……………ねえ、何でソレを剣豪でしかない貴方が探せられたの？」

その問いに面倒くさいと顔をはつきりと浮かばせながらも、

「言っただけだ、小娘。俺を捕まえる、或いは始末するために魔術師や伴天連の坊主、拳げ句の果てに血を吸う化け物が逃がさないために結界を張ってくれてな……………連中を始末しても出られないこともあったりしてな、どこに何があるかを探すことが身に付かざるを得なかったんだよ。強え奴と殺るためのことは全く関係ねえモンばかり覚えちまうとは思いつかなかったぞ」

……………当時の魔術師の方が神秘が現代より上であるため、実力ある人たちの結界を見れば、気付く事があるのだらうと勝手に結論付けた。これ以上聞くと、身が持たないと判断したのだ。

「枝から中身は分からなかったけどな。何せ、魔術師が張ったとは思えねえシロモノだと判断したからな……………具体的なことはお前から聞かなきゃ無理だ。それと、いい加減俺の業でビビるんじゃあねえよ！ 召喚したことを誇っていいぞ……………一応な」

呼んでからというものの、頭が痛くなる内容をどれだけ聞けば終わりが来るのか分からなくなったことに何の感慨が起きなくなりつつあることに不安を感じていた。

学校に着いてからアサシンが見つけた枝を辿っていくと、起点は屋上にあり調べてみればどう見ても魔術師のレベルではなかった。おそらく魔術に長けたサーヴァント、キャスタークラスがやる代物と判断せざるを得なかった。そして、中身は学校の敷地内にいる全ての生物をドロドロに溶かして、自分の魔力として吸収する厄介過ぎたモノであった。そして、自分ではサーヴァントが張った結界を壊すことはできない……。精々時間稼ぎをするのが精一杯である。その内容を話すと、

「フン、度胸があるのか破れかぶれか分からないが、結界を張らせさせたマスターは厄介だ。勝つか死しかない状況を己で作ってやる……こういう相手は予想を付かないことを平気で打つから無理で判断はできねえ、心を読み切るといふ難解なことをしないと駄目だコレは」

有り難くない言葉をぬかしてくれた。

「ねえ、アンタの『斬鉄』で起点は切れないの？」

「発動したなら叩き斬ることはできるが、発動前はどうにもなんねえよ。大体俺は発動前に気付いたら、そこから離れて迎撃していたからな……当然だろうが？」

アサシンの言う通りである。結界に気付いたのなら、範囲内から離脱して自分の有利な方へと導くのは戦闘上常識である。態々、敵の有利な場所で闘わないといけないのは余程の事情があるときだけだ、それ以外では普通しない。至極最もなことを言われ、事態の解決に繋がらないことを認識させられていた。

「でどうするんだ小娘？ 結界を張らせたマスターは第一にお前を

戦争から脱落させるための人質或いは脅迫が目的だと見るが？ あと無視しても、無駄だぞ。脅しを通じないと見たら、すぐに発動させるつもりだから分かりやすくしたとしか思えねえよ。それ以外なら筋金入りの馬鹿だ。だからこそ聞く……。どうするんだ？ボサツとしていないで方針を言いやがれ！！」

まただ、アサシンが向けた気は以前値踏みした時と同じモノを発していた。内容次第によつては私は問答無用で始末する嫌な気であった。だが、返答を間違つてはいけない……。遠坂家の悲願を成し遂げるためには今、自分の命を失うわけにはいかないのだから。私はゆつくりと口を開いた。

「私は降りるわけにはいかないのよ！！！！ このような卑怯な手で降りたら名折れよ！！ 絶対に見つけ出して、勝利して見せるわ！！ そのためにはアサシン、いや御剣平四郎貴方の協力が不可欠よ、どうか力を貸してほしい」

一旦間があつたが、その後に出てくるのはデカイ笑い声であつた。「頭を下げることを知っているみたいだな、いいだろう。やってやるっじゃあないか！！ で今はどうするんだ？ コレをこのまま放置するのか？」

……。どうやら、戴くに値すると見てくれてホッとした。心の中で安堵の息をついて、

「そうね、一時的に無効にすることならできるから、それを行つておいてサーヴァントの出方を待つしかないわ！」

そう言つて、父から受け継いだ魔術刻印を使おうとしたが、「待ちなマスター……。おい、隠す気がねえ殺気をいつまで流し続ければ気が済むんだ？ とつと出て来やがれ！！」

いきなり、アサシンは『気配遮断』を解いて給水塔へと目を向けるのと同時に剣気を向けていたのでそちらに振り向くと、

「何だよ、折角そのお嬢ちゃんとの作戦会議が済むまで黙つて見ていたのによ……。少しぐらい驚かせたつていいじゃあねえか」

給水塔の上には青い獣が顔をにやけながら佇んでいた。だが、そ

の顔は一変し、険しい顔をアサシンに見せていた。

「本来なら、それなりの前口上をするんだが、テメエの姿をはつきりと見えてからというものの頭に『その者を倒せ、殺せ、滅せよ』と世界が囁きかけて煩えんだ。とつとと始めようぜ、煩くてかなわねえんだ」

と言つて、右腕を上げるとさつきまで無手だった右手に紅い槍が握りしめていた。私に向かつて死の旋風がやって来るというのが分かっているのに、頭のある中心にあるのはおそらくランサーだと思われるサーヴァントが言ったことであつた。『世界が囁きかける』・・・それは世界が彼の存在を認めていないことが冗談ではなく、事実だということを認めなければならぬのだ！ ましてや、世界の敵と認定されていることから、それだけ恐れられる何かをコイツ《御剣》がしていることも分かつて頭が真っ白になつてしまった。それを破つたのは、

「ボケツとしているんじゃないやあねえよ！！！！ 死にてえのか！！？」
私をその状態にさせた原因の喝であつた。そこから、一瞬にして頭を切り替えて、

「アサシン、着地任せた！！」

そう言いながらも、急いでフェンスから飛び降りて、校庭へと落下していった。着地をアサシンに任せ、着地と同時に一步でも遠くに離れるために走り出した。距離を取ってから、振り返るとそう離れていないところに青い獣が立っていて、さらに自分に近い所ではアサシンが向かい合つていた。その時アサシンが発していたのは、今まで感じてきたのとは別物で、それが死合いの時に出すモノなんだということがすぐに分かつた。その気を真正面から受けている相手は心なしか一歩引いていて、気押されてもいた。

「なあ、テメエは一体何をしてここまでの気を出せるんだ？ そこまでの領域まで辿りつける者はいねえはずだ！ そんな気を出すのが普通アサシン（暗殺者）か・・・信じられねえ！！？」

動こうともせずに青い獣は驚愕の声を出していた。敵サーヴァン

トからも問われても、

「……世界の野郎、召喚された英霊の能力までも底上げさせて滅ぼしてえのか、まあいい。生憎な、分かっているだろうが俺は世界に非常に毛嫌いされていてな、本来ならセイバーに入るんだが、当て嵌めさせてくれなかったんだよ……。それが原因だ。どうやら、オメエは人でもねえ血を引いているようだが、俺のことを本当に知らないようだ。それはそれでいい、知っちゃったら変に身構えられて死合う相手に無くなっちゃうからな、知ったら単なる鬱陶しい輩と同列になるんだからな!!」

ランサーとて名の知れている英霊であるはずなのに、秘密を知れば数えられる存在でしか過ぎなくなるとはつきりと言われ、

「……テムエツ!!」

怒りを露わにしていた。そんなことを気にも掛けないで、

「どうやら、オメエの得物は槍と見たから槍兵か。槍の絶技がどれだけのモノか楽しみだ。何せ英霊として認められる程の強え奴との死合いをコレでもかと待ち望んでいたからな、それなのに世界が座に就かせてくれねえからできなくてよ、呼ばれて望みがすぐに達成できて満足だ! さあ、存分に死合おうぜ、技と業のぶつけ合いをな!!」

と自分の永らくの願いが叶えられたことに喜び、笑っていた。獲物がやってきて悦ぶ獣の様に。そして、これが彼、御剣平四郎の強さを思い知る最初の一戦であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8479s/>

Fate/soul night

2011年10月9日01時03分発行